

じょう へい じ い せき
上 平 寺 遺 跡 II

— 覚所谷通常砂防工事に伴う発掘調査 —



2004. 3

滋賀県坂田郡
伊吹町教育委員会

序

伊吹町は、伊吹山系を中心とした自然に恵まれ、縄文時代から連続と続く、数多くの歴史的遺産や先人たちが営々と築きあげた優れた伝統文化などにつつまれた町です。

平成15年度は、伊吹町の文化財保護行政の歴史の中でも、特筆すべき年になりました。

滋賀県の天然記念物だった伊吹山頂のお花畑が、「伊吹山頂草原植物群落」の名称で、平成15年7月25日に国の天然記念物に指定されました。これまで、町内外の多くの方や機関に多大なるご指導とご協力をいただいて、今日まで続けてきた保護活動の賜物です。

また、今回の調査に関連する、伊吹山の中腹と山麓に所在する京極氏関連遺跡群が、「京極氏遺跡—京極氏城館跡・弥高寺跡—」として、平成16年2月27日に国の史跡に指定されました。こちらも、地元上平寺・弥高両地区のこれまでの保存活動が実った結果です。

この遺跡は、京極高滑が、16世紀初頭に整備したもので、庭園のある守護館、重臣屋敷、城下町、詰の山城、城郭として利用した山岳寺院跡が良好に残り、「わが国の戦国大名のあり方がわかる遺跡」として指定されました。町では、平成16年度から調査整備委員会を立ち上げて、今後の整備活用を図っていきたいと考えております。

本書は、覚所谷川砂防工事に伴う上平寺遺跡の土・平寺遺跡の発掘調査の結果をまとめたものです。調査では、一部で屋敷地の遺構が検出されたほか、たくさんのお土器を中心に、京極氏時代の遺物が出土しました。

近年、京極氏遺跡は、地元地区のみならず伊吹町のシンボルとして、また、かけがえない歴史遺産として認識されつつあります。今後、歴史学習の場、憩いと交流の場、自然観察の場として、山頂までを含めた壮大な構想を作り上げていかなくてはなりません。

最後に、調査に対しご指導とご協力をいただいた上平寺区の皆さんをはじめ、関係機関各位、発掘調査に参加いただきました皆様、あらためて厚くお礼申し上げます。

平成16年3月

伊吹町教育委員会

教育長 松 嵐 藤 龍

例 言

1. 本書は、滋賀県坂田郡伊吹町大字上平寺に所在する上平寺遺跡の発掘調査報告書である。
2. 本調査は、覚所谷通常砂防工事に伴うもので、滋賀県土木部河川砂防課の委託を受けて、伊吹町教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、平成14・15年度にかけて実施した。整理および報告書の作成は、平成15年度に行なった。
4. 現地調査は伊吹町教育委員会生涯学習課文化財係長・高橋順之が担当した。なお、調査体制は下記のとおりである。

調査主体 伊吹町教育委員会 教育長 松嵐龍

調査事務局 伊吹町教育委員会 生涯学習課

課長 山崎完一（平成14年度）伊富貴孝司（平成15年度）

課長補佐 膽吹邦一（平成14年度）福永信夫（平成15年度）

主事 高橋文彦（平成14・15年度）

調査作業員

的場育代 小林新吾 三宅美一 平山勝子 後藤美智子 阿部修平 筒井善之

西川 宏 三宅美一 多賀 兼 宮川早苗 谷口美千代 高橋利子

5. 遺物の整理・実測等に関しては、上記作業員のうちの場・平山・後藤・高橋がおこなった。
6. 遺物の写真撮影は、上垣幸徳氏（滋賀県文化財保護協会）に依頼した。
7. 本書は、高橋順之が執筆・編集した。
8. 発掘調査および報告書の作成にあたって、次の方々からご指導・ご助言・ご協力をいただいた。記して厚く感謝の意を表す次第である。（敬称略・順不同）

磯部敏雄 桂田峰男 木戸雅寿 中井 均 福永圓澄 宮崎幹也

10. 調査記録および出土品は、伊吹町教育委員会が保管している。

目 次

序

例言・凡例

第1章 遺跡の環境

第1節 自然環境……………2

第2節 歴史的環境……………4

第2章 国史跡「京極氏遺跡」とこれまでの調査……………6

第3章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過……………12

第2節 試掘調査の結果……………14

第4章 発掘調査の結果

第1節 T1の調査

i) 層序……………16

ii) 遺構……………16

iii) 遺物……………17

第2節 T2の調査

i) 層序……………19

ii) 遺構……………19

1. 石垣……………19 2. 土坑……………19

3. その他の遺構……………22

iii) 遺物……………23

1. 土器類……………23 2. 金属製品……………26

第3節 T3の調査

i) 層序……………30

ii) 遺構……………30

1. 石列……………30 2. 石垣……………33

3. 土坑……………33 4. その他の遺構……………34

iii) 遺物……………34

1. 土器類……………34 2. 金属製品……………35

第4節 T4の調査

i) 層序……………38

ii) 遺構……………38

1. 溝……………38 2. 土坑……………38

3. その他の遺構……………39

iii) 遺物	39
1. 土器類	39
2. 金属製品	39
3. 木製品	39
4. 石製品	41
iv) サブトレンチ	41
第5節 T5の調査	
i) 層序	42
ii) 遺構	42
1. 溝	42
2. 竪穴状遺構	44
3. 土師皿一括投棄遺構	44
4. その他の遺構	45
iii) 遺物	46
1. 土器類	46
2. 金属製品	48
3. 石製品	49
第6節 縄文時代の遺物	
第5章 まとめ	57

挿 図 目 次

第1図	京極氏遺跡位置図	1
第2図	坂田郡の街道と宿場	3
第3図	上平寺城下地形図	5
第4図	『上平寺城絵図』トレース図	9
第5図	城下地区調査区遺構図(T4)	10
第6図	城下地区調査区遺構図(T10)	10
第7図	上平寺南館遺跡調査区遺構図	11
第8図	試掘トレンチ位置図	13
第9図	ST3断面図	14
第10図	発掘調査区位置図	15
第11図	T1遺構図	18
第12図	T1出土遺物実測図	18
第13図	T2遺構図	20
第14図	石垣実測図	21
第15図	T2出土遺物実測図(1)	27
第16図	T2出土遺物実測図(2)	28
第17図	T2出土遺物実測図(3)	29
第18図	T3遺構図	31
第19図	石列1・石垣1実測図	32
第20図	T3出土遺物実測図(1)	36
第21図	T3出土遺物実測図(2)	37
第22図	T4遺構図	40
第23図	ST1・ST2断面図	41
第24図	T4出土遺物実測図	42
第25図	T5遺構図	43
第26図	土師皿一括投棄遺構1実測図	45
第27図	土師皿一括投棄遺構2実測図	45
第28図	縄文土器	48
第29図	T5出土遺物実測図(1)	49
第30図	T5出土遺物実測図(2)	50
第31図	T5出土遺物実測図(3)	51
第32図	T5出土遺物実測図(4)	52
第33図	T5出土遺物実測図(5)	53
第34図	T5出土遺物実測図(6)	54
第35図	近世陶器実測図	55
第36図	金属製品・木製品・石製品実測図	56

表 目 次

出土土師皿口径別個体数表 1～6	60
------------------------	----

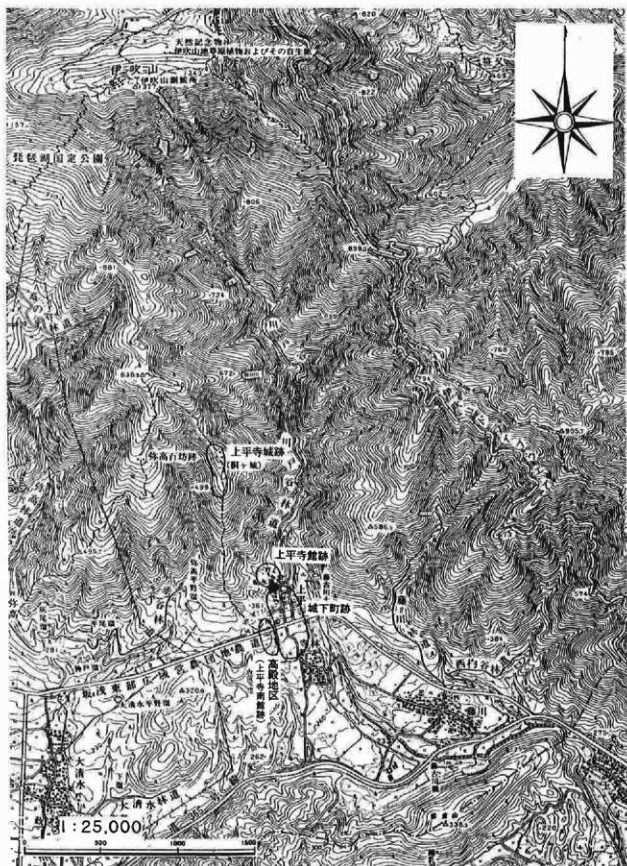
図 版 目 次

図版 1	T 1 調査前 T 1 全景 作業風景
図版 2	T 2 調査前 T 2 全景 遺物出土状況
図版 3	T 2 SK10 石垣 (西側) 石垣 (北側 1)
図版 4	石垣 (北側 2) 石垣 (北側 3) T 3・4 調査前
図版 5	作業風景 T 3 全景 T 3 石垣
図版 6	石列 (東から) 石列 (西から)
図版 7	T 3 東半分 T 4 全景 埋め残
図版 8	T 4 ST 1 T 4 ST 2 ST 1 堀 ST 2 堀
図版 9	T 5 全景 (北から) T 5 全景 (南から) T 5 SH 1

- 図版10 T5 土師皿投棄遺構 1
 T5 土師皿投棄遺構 1
 T5 土師皿投棄遺構 2
 図版11 内堀
 図版12 T3・T4 出土遺物
 T5 出土遺物 (1)
 図版13 T5 出土遺物 (2)
 T5 出土遺物 (3)
 図版14 T5 出土遺物 (4)
 T5 出土遺物 (5)
 図版15 T5 出土遺物 (6)
 縄文土器
 図版16 金属製品
 石製品

写真図版

- 写真1 石列2～533
 写真2 石囲い遺構34



第1図 京極氏遺跡位置図 (●印調査地)

第1章 遺跡の環境

第1節 自然環境

遺跡周辺の地形

坂田郡伊吹町は滋賀県の北東端に位置し、東および北は伊吹山地をはさんで岐阜県となり、南から不破郡関ヶ原町、揖斐郡春日村・坂内村に接している。西は七尾山系をはさんで滋賀県東浅井郡浅井町。南は伊吹山西南麓の扇状地から山東盆地となり、坂田郡山東町に接しており、その西には横山丘陵があり、長浜市さらに琵琶湖へと続く。町域は東西約7.0 km、南北約22.7 kmと細長く、面積109.17 km²の約85%を山林がしめる。北中部の集落は、伊吹山地とこれに対峙する七尾山系がつくる姉川溪谷沿いに点在し、南部および上平寺遺跡がある東部の集落は、伊吹山から流れ出る数本の河川が形成した扇状地の扇央部や扇端部に立地している。

伊吹山地は、滋賀県の最高峰伊吹山(標高1377m)を南端にして、北へ国見山(1126m)、虎子山(1183m)、射能山(1259m)、貝月山(1234m)と連なり、さらに県下第2位の金養岳(1317m)をはじめ標高1000~1200mの稜線や峰が、滋賀・福井・岐阜三県にまたがる三国岳(1209m)へと続く地壘性の山地である。三国岳からは越美山系となり、遠く越前・美濃国境の能登白山へと続く。伊吹山地は、滋賀県側の姉川水系と岐阜県側の揖斐川水系の分水界であり、古くから近江と美濃の国境であった。

町内の河川は、姉川・天野川・藤古川(河戸川)の3水系に分けることができる。姉川水系は、新徳山(1067m)に源をもつ姉川が、伊吹山地と七尾山系の間の溪谷で多くの支流を集めながら町内を約20 km弱にわたって南北に貫流し、伊吹町伊吹付近で大きく西へふれ、山東町・浅井町の水田を潤しながら、横山丘陵北端の龍ヶ鼻付近で長浜平野に出て琵琶湖へ流れ込む。伊吹山西南麓の天野川水系は、扇状地を流れ下る弥高川・油里川・政所川が扇端部の湧水を集めて天野川に合流し琵琶湖にそそぐ。藤古川は、町内6 kmの間を伊吹山南側中腹の標高720mから一気に流れ下って溪谷を作り、南東に流れを変えて関ヶ原盆地に入り、牧田川、揖斐川を経て伊勢湾にそそぐ。県内の諸河川が琵琶湖に流れる中で、特異な例としてあげられる。

今回報告する上平寺遺跡は、伊吹山南麓に位置し、藤古川上流域の西側扇央部に位置する上平寺とその南の寺林集落の間に所在している。上平寺は扇頂部付近にあたり、伊吹山地に取り込まれたわずかに広がる高台に位置する集落である。中心部付近の標高は315mを測る。集落の西は伊吹山から延びる尾根が台地状に張り出しており、東側は藤古川の急峻な断崖で、深さ約30mを測る。南は寺林の集落を経て、扇状地上に水田が広がり、関ヶ原峡谷になる。東には藤古川をはさんで藤川集落があり、ここは北国脇往還の宿場町で、中山道関ヶ原宿で分岐して伊吹山麓を通り、北国街道木之本宿につながる、東海と北陸を結ぶ重要なルートである。また、藤古川の溪谷をさかのぼり、伊吹山頂から南東に延びる稜

線の鞍部の峠にとりつく上平寺越は、近江と美濃を結ぶ古くからの間道の一つと考えられる。さらに、東国と畿内を結ぶ東山道（中山道）にも近く、地理的に交通の要衝として重要な位置にある。

遺跡周辺の地質と自然

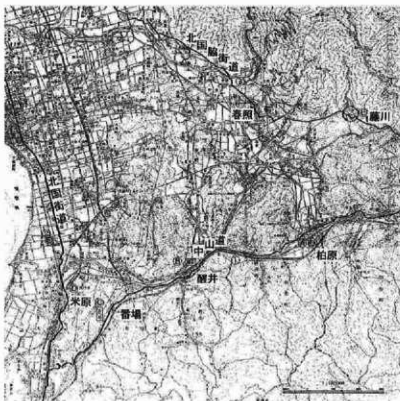
伊吹山地の地質は、古生層の石灰岩相と非石灰岩相の2つに分けられる。石灰岩相は伊吹山と南西部の丘陵に分布している。遺跡が立地する上平寺の北西は、伊吹山の南に張り付く弥高山（標高 838.9m）の山麓で、この山塊は伊吹山の石灰岩層とは異なり砂岩層で形成されている。藤古川対岸は砂岩および粘板岩の山塊である。南は伊吹山南麓に広がる扇状地堆積物層が発達しており、古生層岩石の礫を主として、粘土をはさんでいることが多く、時代は洪積世新期のものと考えられている。藤川地区の景境付近には、約 130 万年前の古琵琶湖層群が堆積している。この層は主として砂礫層からなっており、少量の泥層を含み、この中にコメツガ・ハンノキ・ヒメバラモミなどの植物遺体が含まれている。関ヶ原方面から古琵琶湖に水が流入して堆積したものと推定されています。

伊吹山付近は、若狭湾と伊勢湾が迫ってくる本州でもっとも狭い部分にあたり、まわりは中部山地と霊仙・鈴鹿山地、丹波山地に囲まれている。この狭い部分を目指して、冬は若狭湾から北西の季節風が、夏は伊勢湾から南東の風が入ってくる。伊吹町の気候は、ほとんどの地域が日本海側気候区北陸型に属すといわれ、気温が低く降水量が多いうえ、特に冬期の積雪が多いことが特徴とされている。町の南部地域は最高気温と最低気温の差が北中部にくらべるとやや少なく、平均気温もやや高くなって降水量も少なくなるが、上平寺周辺は、伊吹山系と霊仙・鈴鹿山系との接点に位置するとともに関ヶ原の狭隘を吹き抜ける風の道にあたっているために、積雪量が多く豪雪地帯となっている。

（参考文献）

伊吹町史編さん委員会編
『伊吹町史 自然編』

伊吹町 1992



第2図 坂田郡の街道と宿場（○印上平寺）

第2節 歴史的環境

町内でもっとも古い遺物は、人塚遺跡（上野）で採集された、旧石器時代終末に属すと考えられる木の葉形の尖頭器である。

続く縄文時代の遺跡が、全時代を通して最も多く22カ所を数える。早期は、起し又遺跡（曲谷）や、東野遺跡（弥高）などがあり、前期の遺跡は確認されていない。

中期から後期初頭は、山麓や山間部でもっとも活発に縄文人が活動した時期で、山間部では、起し又遺跡、西山遺跡（甲津原）、内座遺跡（上板並）、伊吹遺跡（小泉）があり、山麓では、井の田遺跡（大清水）、大清水遺跡（大清水）等がある。平成11・12年度に滋賀県教育委員会が行なった上平等寺遺跡の発掘調査でも、中期末を主体とする遺物が出土している。晩期には、著名な杉沢遺跡がある。

弥生時代の状況はよくわかっていない、数カ所でわずかな遺物が採集されているのみである。古墳時代も、井の田遺跡（大清水）で、完形品のS字口縁甕が出土しているほか、人塚古墳・ミミ塚古墳（上野）の調査が行われている程度である。

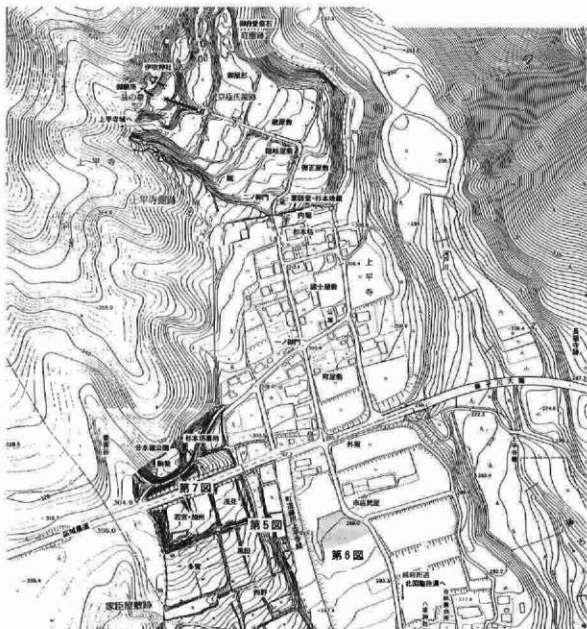
奈良時代から平安時代初頭は、寺林遺跡（寺林）で掘立柱建物や竪穴住居が見つかるほか、高番遺跡（高番）などで遺物が出土している。この時期伊吹山中腹では山岳仏教寺院が展開し、仁寿年間（851～854）に三條が開いた伊吹山護国寺は、のちに弥高寺（弥高）、長尾寺（大久保）、観音寺（山東町）、太平寺（旧太平寺）のいわゆる伊吹四カ寺に発展する。

（中世）

伊吹四カ寺は、元元年間（1266頃）に観音寺が現在地の山東町朝日に移転したあと、弥高寺と太平寺が勢力を誇り、徳治3年（1308）には両寺が本末寺をめぐる論争を起こしている。一説に太平寺を京極家始祖の氏信が城塞化し、その後も京極氏の山城的機能を果たしていたといわれているが、古文書による裏付けは不充分といわざるをえない。しかし、時代は下るが、明応4年（1495）に京極政高が弥高寺から出兵し、翌年には京極高清が同寺に布陣するなど、京極氏が弥高寺を利用していることを考えると、太平寺も南北朝期の山岳寺院をそのまま利用した立て籠もる拠点として利用したのかもしれない。太平寺跡は、現在石灰石採掘などにより詳細は不明であるが、弥高寺跡には空堀や堀切・堅堀群、虎口状の大門跡、土塁など城郭機能と思われる遺構が明瞭に残っている。

北近江を支配した京極氏は、仁治2年（1241）に近江守護職佐々木信綱の四男氏信が愛知川以北六部を与えられ、柏原（山東町）に館を構えたことに始まる。京極氏の居館は、京極高氏（道誉）が建武4年（1337）に甲良荘に館（勝楽寺城）を移した一時期をのぞいて、柏原館であったと考えられる。上平等寺館は、明応元年（1492）改めて京極家の惣領職を認められた高清が、永正2年（1505）京極材宗と和睦して、文明年間以来続いた一族の内紛を納め、政権を確立したことで構築・整備したものと考えられる。同時に、山腹の詰の城・上平等城、台地上の家臣団屋敷群とともに、今回調査をおこなった城下町を整備し

たものと思われる。しかし、上平寺館と城下の機能は、大永3年(1523)の浅見氏ら国人の攻撃で、高濑が尾張に迫られることで終わりを告げる。その後、一般には小谷城を拠点にした浅井氏三代に北近江の政権が替わったといわれているが、文書からの検証では、天文20年(1551)頃まで坂田郡南部を中心に京極高広による政権が機能しており、その居館が河内城(山東町)であった可能性があるという。



第3図 上平寺城下地形図

第2章 国史跡「京極氏遺跡」とこれまでの調査

京極氏の上平寺館遺跡、家臣屋敷跡（高殿地区）、上平寺城遺跡および、関連する寺院として弥高寺遺跡が、平成16年2月27日に国の史跡に指定された。指定範囲には、現在、居住空間（集落）と生産空間（田畑）になっている城下（上平寺遺跡）や、長福寺などの寺院遺跡は含まれていない。史跡の名称は「京極氏遺跡—京極氏城館跡・弥高寺跡—」である。

今回報告する上平寺遺跡は、『平成13年度滋賀県遺跡地図』の遺跡の種類項目に「寺院跡・城下町跡」と記されている。その範囲は、現在の上平寺集落の全域から寺林集落を東西にはしる北国脇往還までで、これは、上平寺城下とこれに先行して存在したと考えられる寺院・上平寺の寺坊跡を包括している。今回の調査地は遺跡範囲の北端にあたり、内堀跡をはさんで上平寺館遺跡に接している。

また、元伊吹町史編さん室長の福永圓澄氏によると、今回の調査区のうちT2は上平寺の寺坊「密藏院」の跡地であるといい、その二段下が「山本坊」、さらに「谷本坊」があったという。後者二坊については、現在も山本姓、谷本姓を名乗る。T3には、杉本坊の前身の建物があったことが、明治の地籍図から予想される。

上平寺遺跡には、北に隣接して上平寺館遺跡、西側に上平寺南館遺跡（高殿地区）、さらに背後の標高約669m付近の尾根上には上平寺城遺跡があり（第1図）、全体で京極氏の城館および城下を構成していることから、伊吹町教育委員会が平成7年度以降おこなっている詳細分布調査では、「上平寺城跡遺跡群」として調査を進めている。近世の比較早い時期に描かれたと考えられている『上平寺城絵図』（伊吹町役場蔵）には、これらの遺跡が、現存遺構や道路・地割りの現況とかなり合致した状況で描かれており、信憑性の高い資料である。

上平寺城は、別称を刈安尾城、桐（櫨）ヶ城といい、文書では「かりやす尾の御城」と記されることが多い。文献上の初見は大永3年（1523）、「梅本坊の公事」と呼ばれる国人一揆の記述（『江北記』）である。山城は、館や城下が廃絶したあととも江濃国境警護の城として機能していたようで、元亀元年（1570）対織田信長戦に備えて、浅井長政が越前朝倉氏の援助で上平寺城や長比城（山東町）を改修している記述が『信長公記』にみえる。発掘調査は実施されていないが、平成2年以来継続した刈り払いと踏査により遺構の確認をおこない、平成12年度と13年度の2カ年で測量調査を実施している。主郭部分の標高が669m、城域は南北約306m、東西約54mの規模をもち、尾根上一直線に曲輪を配置している。長大な土塁囲いのテクニック、外柵形空間をもつ虎口、南端に放射状に設けられた堅堀群などの現存遺構は、元亀元年の改修時のものと考えられる。

山麓の上平寺城下を構成していたとおもわれる遺跡には、今回報告する上平寺遺跡と先に述べた上平寺館遺跡、上平寺南館遺跡（高殿地区）がある。『上平寺城絵図』に描かれた、いわゆる上平寺城跡遺跡群は、「刈安尾・本丸」などと記された上平寺城部分の他に、

①「ホリ」内側の「御屋形・隠岐屋敷・弾正屋敷」など京極氏の居館とその重臣屋敷部分

- ②「外ホリ」内側の「諸上屋敷・町屋敷」と記された家臣団等の居住区と考えられる部分
- ③「外ホリ」「越前□(街)道」(北国脇往還)の間の「市店民屋」部分
- ④西側台地上の「若宮・加州・浅見・黒田・多賀・西野・上舘衆・駒繁」などと記された重臣屋敷部分

に大別できる。それぞれ、①は上平寺館遺跡、②・③は上平寺遺跡(城下)、④は上平寺南館遺跡に該当する。

京極氏の館があったと考えられる①は、東を藤古川の急峻な断崖、西南を谷と内堀と呼ばれる細い谷川で区画されている。絵図に「御館」とある京極氏館跡は約60×40mの規模で、さらに北側に約55×15mの庭園跡をもつ。他に約32×25mで三方を土塁で囲まれた隠岐氏屋敷など、中心の道の両側に展開する十数段の削平地で構成されている。当遺跡は大永3年に湖北の政治的拠点としての地位を無くしたとおもわれるが、元亀元年に京極高吉が隠棲している記事があり、この時期まで何らかの形で存続していたのであろう。平成7年度から9年度に町教育委員会において地形測量と遺物の表採をおこない、館の時期とはほぼ重なる16世紀前半頃を中心とする土師皿などを採集した。京極氏館跡庭園は、二つの池と100点近くの大小の石を用いたもので、作庭時期のわかる武家屋敷庭園として貴重な遺構である。このような庭園を持つことで京極氏が幕府の公権力を具現化していたことがうかがわれる。

②は現在の上平寺集落とほぼ重なり、③は主に水出として利用されている。この上平寺遺跡の南端を北国脇往還が通る。上平寺遺跡の発掘調査は、平成9年度から12年度にかけて、町教育委員会で町道建設に伴う発掘調査を行っており、掘立柱建物や井戸跡などが出土している。また、平成11・12年度の県教育委員会の調査では、城下町造営当初のものとみられる整地土層や暗渠施設が確認されている。

また、これらの調査結果から、上平寺城下の南限が想定され、絵図の「越前街道」までおよんでいなかったことが想定された。

④は城下の西側に張り出した尾根上の高台で、大小10以上の削平地が整然と並ぶ。絵図に記載されている六人の家臣屋敷にはほぼ合致する。この西には絵図に「要害谷」と記された深い谷がある。当遺跡では、平成10・11年度に町教育委員会で地形測量と踏査をおこなったほか、平成9年度には、絵図の「駒繁」と「若宮」の間の「径」部分で、滋賀県教育委員会による発掘調査がおこなわれ、堀切・土塁を兼ねた石敷きの道が確認された。また、平成11年度の町教育委員会による「駒繁」の確認調査では、京極氏段階に整地された層を確認した。さらに、平成12年度の推定「若宮」屋敷の調査では、屋敷内を区切る築地か門とおもわれる石垣遺構を検出した。

上平寺城下全体を見ると、北には上平寺城がある伊吹山がそびえ、西はそれから続く尾根および、家臣屋敷がのる台地と「要害谷」。東は深い谷をもつ藤古川が存在し、南を外堀で区画することで、自然地形を最大限に利用し、さらに堀や屋敷地を組み合わせ、防御する形になっていることがわかる。

このように、上平寺城跡遺跡群は戦国時代の山城、居館、城下町がセットで残る全国的にも貴重な事例で、近年ようやく研究成果や調査の成果が公開されて遺跡自体が持つ情報が増加し、第1級の遺跡であると注目され、今回の国史跡指定につながった。

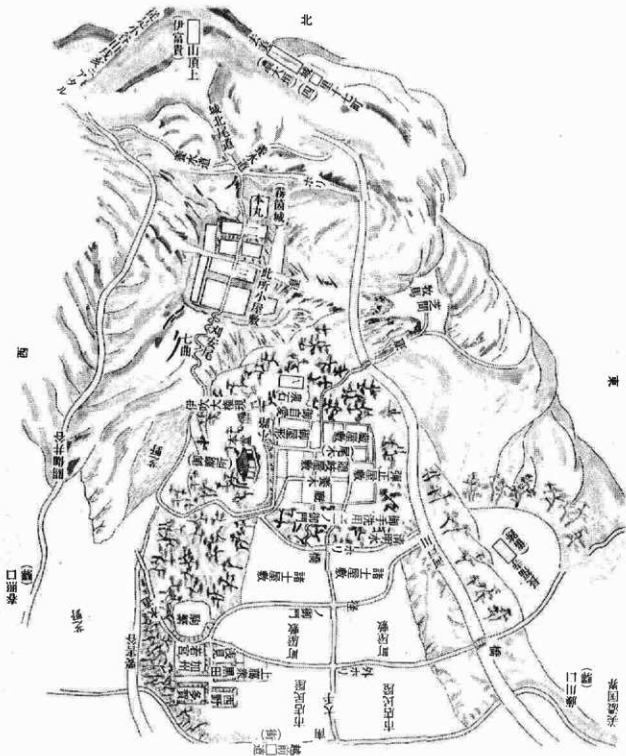
〈参考文献〉

(論考)

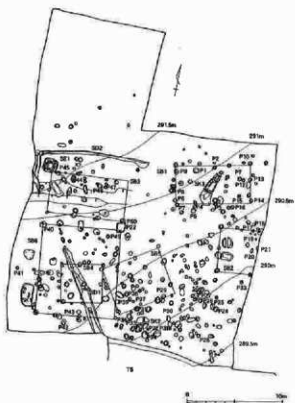
- 長谷川銀藏・博美 1985「上平寺城跡」(『近江の城』16)
用田政晴 1985「弥高百坊の調査について」(『近江の城』16)
小和田哲男 1985「京極氏の内訌と上平寺城」(『近江の城』16)
小島道裕 1989「上平寺城下について—地名と絵図—」(『近江の城』34、1997年「城と城下」に再録) 新人物往来社
中井 均・高橋順之 1994「上平寺城とその城下—遺構と絵図からの再検討—」(『近江地方史研究』29.30)
中井 均 1997「知られざる山城・上平寺城」(『近江の城—城が語る湖国の戦国史—) サンライズ出版
中井 均 1998「戦国期城館の庭園」(『上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ』) 伊吹町教育委員会
太田浩司 2000「戦国期京極氏の家臣団—文献史学からの考察—」(『同上Ⅱ』) 伊吹町教育委員会

(書籍)

- 伊吹町教育委員会編 2003『京極氏の城・まち・寺』サンライズ出版
(報告書)
用田政晴 1986「弥高寺跡調査概要」(伊吹町文化財調査報告書第1集)
高橋順之 1998「上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅰ 上平寺館跡」(同12集)
高橋順之 2000「上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅱ 高殿地区」(同13集)
稲葉隆宣 2000「上平寺南館遺跡」滋賀県教育委員会
高橋順之 2001「上平寺遺跡・寺林遺跡」(伊吹町文化財調査報告書第14集)
高橋順之 2002「推定若宮・浅見屋敷跡発掘調査報告書」(伊吹町文化財報告書第15集)
高橋順之 2002「駒繋跡・杉本坊墓地発掘調査報告書」(同16集)
高橋順之 2002「上平寺城跡遺跡群分布調査概要報告書Ⅲ 上平寺城跡」(同17集)
内田保之・日紫喜勝重 2003『上平寺遺跡・寺林遺跡』滋賀県教育委員会



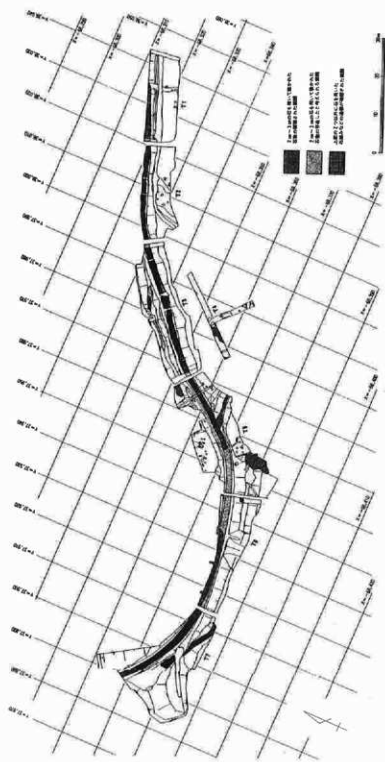
第4図 「上平寺城絵図」トレース図(中井均氏原図)



第5図 城下地区調査区T4遺構図(町教委調査:位置は第3図参照)



第6図 城下地区調査区T10遺構図(県教委調査:位置は第3図参照)



第7図 上平寺南館遺跡調査区遺構図 (位置は第3図参照)

第3章 発掘調査の経過

第1節 調査に至る経過

今回の調査は、覚所谷通常砂防工事に伴うものである。この工事では、上平寺集落背後の山手を通る「覚所谷川」の谷部に砂防堰堤1基と、溪流保全工 L=272mの建設が計画された。

覚所谷川は、上平寺館跡の南西で発し、館正面を東西に流れる川で、土石流危険溪流となっている。溪流は、伊吹山麓の標高約500mの稜線付近を水源として南東方向に流れ、藤古川・牧田川そして掛斐川を経て伊勢湾に流入する。地元では「内堀」と呼ばれていることから、京極氏が城館を構えた当時、内堀があったものと想定されている。現在では、幅約50cmの溝川で、普段はあまり水が流れていない。

当地の地質は、三疊紀～ジュラ紀の美濃帯の粘板岩で形成され、上流域の溪床には新しく流出したと見られる礫や流木が認められ、未固結堆積物として形成されている。

ダムの計画地点は、河道の勾配が約1/5と急峻で、溪床付近はたび重なる土砂の流出により堆積物が厚く分布しており、上流域の崩壊堆積土砂も含めて現在も不安定な状態である。保全の対象となる谷の出口付近には、地域住民の生活道路が通過しており、付近には人家が密集している。このような状況のもとで、一旦斜面崩壊や溪岸の決壊に伴う土石流が発生・流下すると、多大な被害が及ぶことが予想され、実際、過去に台風や大雨に見舞われ、許容範囲以上の水量となって土砂の流出をもたらし、たびたび災害を引き起こしてきた。今回の工事は、このような土砂流出を未然に防止し、民生の安定をはかるためのものである。

このようなことから、地元上平寺区では、砂防工事に対する要望を町に提出し、今回の改良工事が計画された。ただし、上平寺城跡遺跡群は第1級の遺跡であるために、当初の計画案に対して協議を重ね、流路に伴う試掘調査を、平成14年3月に行なった結果、一部堀跡を確認したために、内堀部分については、東端の一部を除いて管理用道路として地下保存することとし、流路部分について、全面的な発掘調査をおこなうこととなった。

さらに、集落内の道幅が狭く、日常生活に支障がでる可能性があるために、西側山裾に、砂防堰堤に資材を運ぶための仮設道路が建設されることになった。仮設道路については、館跡や家臣屋敷跡が国の指定になることを考慮し、中世の雰囲気の色濃く残す上平寺の景観に配慮して、できる限り山側に設けるように調整を行ない、さらに、将来的には、遺跡見学のための周回道路になるよう配慮された。この部分については、平成15年7月2日に試掘調査を行い、遺構を検出した部分については発掘調査を行った。

この流路部分には、『上平寺城絵図』の描写では、「一之御門」と「(内)ホリ」にはさまれた部分で、「諸土屋敷」と記載されている区画の北端にあたる。

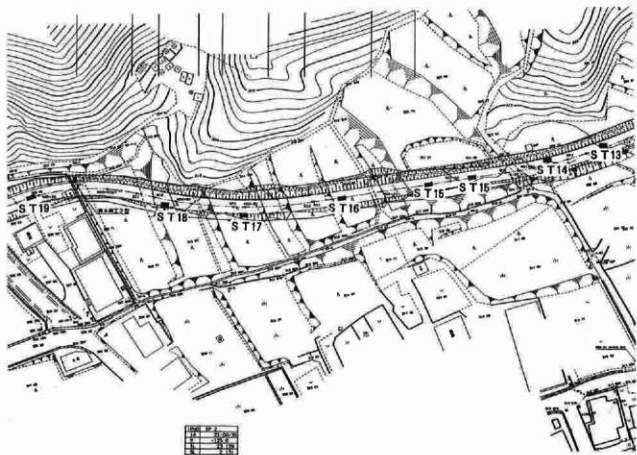
なお、この谷の小字名は「風呂屋谷」であり、谷をはさんで館跡と対峙する南西側の尾

根を「大谷」という。河川名の由来である「覚所谷」は、大谷のさらに南の谷をさしていることから、河川名と本来の地名の位置に食い違いが生じている。

現地は、谷部に棚田状の小区画の空間が一行に並んでいる。流路部分については、西側の2区画は元屋敷地で、調査区T1を設定した区画は植林されていた。神社への道をはさんで、東側は、いずれも山林である。また、平成15年度に行なった仮設道の調査区も現況は山林である。

発掘調査面積は、820㎡（平成14年度635㎡、平成15年度185㎡）である。調査区の番号は調査の順番に応じて数字で示すが、T3、T4については、排土を反転して調査をおこなった。また、各遺構番号は、調査区ごとで完結することとした。

発掘調査は、重機により耕作土と床土以下に分けて遺構検出面直上まで除去したのち、作業員による遺構の検出と遺構内の掘削、遺物の検出をおこない、写真撮影と実測図の作成により記録した。調査は、平成14年度は平成14年4月22日から12月24日および、平成15年2月13日から3月25日の期間中におこなった。平成15年度は平成15年7月22日から8月27日までにおこなった。



第8図 試掘トレンチ位置図（ST1～12は第10図）

第2節 試掘調査の結果

流路部分の試掘調査(第10図)は、平成14年3月に行なった。内堀と考えられる覚所谷川の水路部分に5カ所、谷部の削平地に1カ所、屋敷部分に4カ所の計10カ所である。東側については、立木や重機搬入の問題があり試掘を行っていない。谷部の試掘は、ST3を除いて人力で行なった。屋敷跡については、掘削を0.4m³級のバックホーで遺構面直上までおこない、人力で遺構の検出をおこなった。原則として遺構の掘削をおこなわず、写真撮影、平面図と土層柱状図を作成した。

調査の結果、屋敷地に設定したST7、9・10では、地表下約10~50cm下に遺構面と思われる黄色土層を確認した。ST9・10ではピットを検出した。内堀部分の調査では、ST3で、深さ約1mの掘状遺構を検出した他は、U字溝などによりかく乱を受けていた。

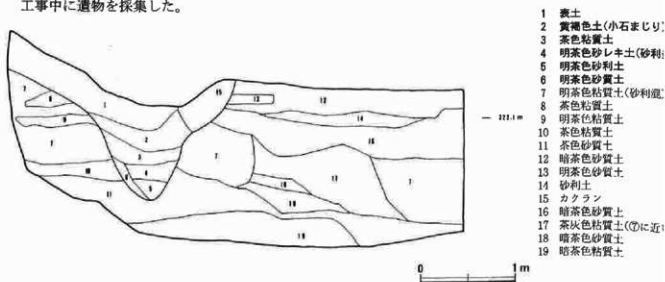
出土遺物としては、土師皿、陶器があるが、近年まで民家があったために、近現代の陶磁器や瓶などが多量に出土した。

仮設道路の試掘については、1m×2mの試掘トレンチを10カ所設定(第8図)した。掘削は0.4m³級のバックホーで遺構面直上までおこない、写真撮影、平面図と土層柱状図を作成した。

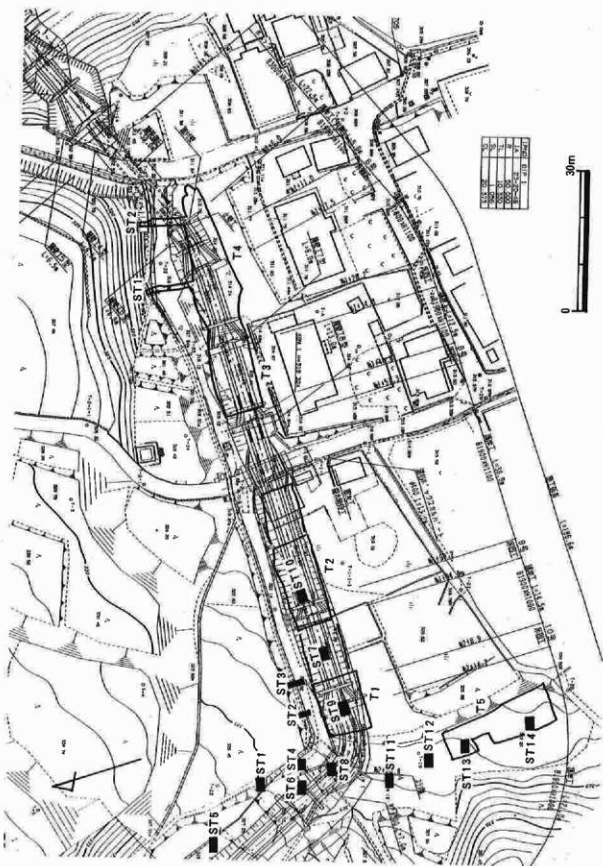
調査の結果、ST13で溝状遺構を検出し、土師皿の小片が出土した。ST14では、直径70cm大のピットを検出した。これを受けて、両トレンチを中心に調査区T5を設定した。

他のトレンチの状況は、ST11では、地表下約90cmのところから砂利や細かい砂質土となり、谷の崩壊土の堆積と考えられる。ST6でも遺構面と考えられる茶色粘質土層の一部確認したが、ST5では表土直下が砂利土の堆積になっていた。ST7~9では、西側の谷部からの崩壊土と思われる砂質土・砂礫土・砂利土が堆積していた。

ST19では、試掘調査で遺構や遺物を確認しなかったため、本調査を行わなかったが、工事中に遺物を採集した。



第9図 ST3断面図



第 10 图 発掘調査区位置図

第4章 発掘調査の結果

第1節 T1の調査

i) 層序

T1は、流路調査区西端に設定した調査区で、東西約11m×南北約8.5mをはかる。現状は山林であるが、20年ぐらい前には、二階建ての小屋が建っていたという。また、明治6年の地籍図にも「屋敷地」となっている。調査前の標高は322.48mを測る。

調査では、約5～15cmの表土をはがすと、30～50cm大の礎石が出土した。これは、先の小屋に伴うものである。ただし、調査区の東側では、この遺構面が見られなかった。遺構面直上からの出土遺物は、陶磁器・釘などの鉄製品・玩具などがあり、いずれも近現代のものであるが、わずかに京極氏段階の土師皿が混じる。

さらにこの面の下層は、西側及び南側も山砂利の層になる。これは、覚所谷（風呂屋谷）の崩壊土層であろう。わずかに中央北側部分のみ、地表下約70cmで黄茶色粘質土層が見られ、炭の堆積SX1が見られた（第2遺構面）。また、近世陶器の大甕の底部が掘えられた状態で出土している。

T1の上段で設定した試掘トレンチST1・2が、ともに覚所谷の崩壊土層の堆積だったことから、ある時期に第2遺構面をほとんど削り取るような上砂が流れたことが考えられる。わずかにSX1から土師皿等が出土していることから、この面が戦国期の遺構面と考えられる。

ii) 遺構（第11図）

1. 近世家屋（第11図）

SB1

T1の表土直下（第1遺構面）で確認した建物跡で、20年程前まであったという二階建ての小屋である。90cm間隔で礎石が並ぶ。

2. 土坑

SK1（写真1）

第2遺構面直上で検出した陶製の大甕1の埋置遺構で、底部のみを検出した。第1遺構面で口縁部を検出しており、この面に伴う埋甕である。平成3年に調査された米原町松尾寺遺跡で同様の大甕が検出されており、内面に白色のカルシウム分が密着していたといい、報告書では便槽等が考えられると記されている。今回検出した大甕は、内面に同様の付着物が見られず、水甕などの用途を想定したい。

3. その他の遺構

SX1

第2遺構面で確認した炭の堆積で、直径約50cm、深さ5cm程度を測る。木炭のほか、土

師皿（4～11）が混在していた。

iii) 遺物

上平等遺跡出土の土器・陶磁器には、古代から現代に至る時代のものが含まれている。このうちの大部分を占めるのは京極氏が城館を構えた中世のものである。本書における遺物の記述は、各調査区ごとに土器類・金属製品・木製品・石製品の順で取り上げる。さらに、土器類は材質上大きく土器・陶器・磁器に分けられるが、焼成方法や生産地などから、土師質土器・瓦質土器・国産陶器・輸入陶器に分けることができる。ここでは、中世を中心に主要な資料を提示し、必要に応じて遺構外の出土遺物や中世以外の時期の資料を取り上げたい。

1. 土器類（第12図：1のみ第35図）

T1からは、土師皿、瀬戸美濃の国産陶器が出土している。

SK1出土品

1は、近世陶器の大甕底部である。底径約21cmを測る。色調は浅黄橙色で、釉薬などは施されていない。T2で出土した26とT4の197と色調・胎土・プロポジションともに同じタイプのものである。

SD2出土品

SD2は中世の遺構面で検出した溝状の遺構である。2・3は土師皿である。2は口径約9.8cmを測り、やや内湾して立ち上がったあと、口縁端部を横ナデによりつまみ出す。3は口径約13.8cmで、まっすぐ立ち上がる体部をもち、先端を細く納める。ともに色調は浅黄橙色を呈する。

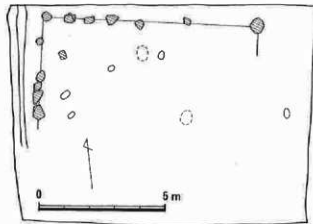
SX1出土品

4～11は土師皿である。4は約3分の1が残存しており、口径約9.0cm、高さ約1.6cmを測る。口縁部にナデ調整を施し、端部は横ナデにより細く仕上げる。内面にひも状のタール痕が残る。5は口径約10.0cmを測り、凹凸の多い粗雑な体部を持つ。口縁端部を横ナデによりつまみ上げる。6は口径約11.4cmをはかる。7は口径約13.4cmで、体部は大きく外に開き、口縁付近でさらに外反させる。8は口径約13.4cmで、まっすぐに開く体部を持つ。口縁端部は横ナデが施され、外面にはへら状工具により明瞭な段がある。9は口径約14.0cm、高さ約1.8cmで、まっすぐに開く体部から口縁部をやや外反させている。10・11は口径約15.8cm、17.6cmと差があるが、同一個体の可能性がある。まっすぐ外に開く体部を持つ。いずれも焼成は堅く、色調は灰白色あるいは浅黄橙色である。

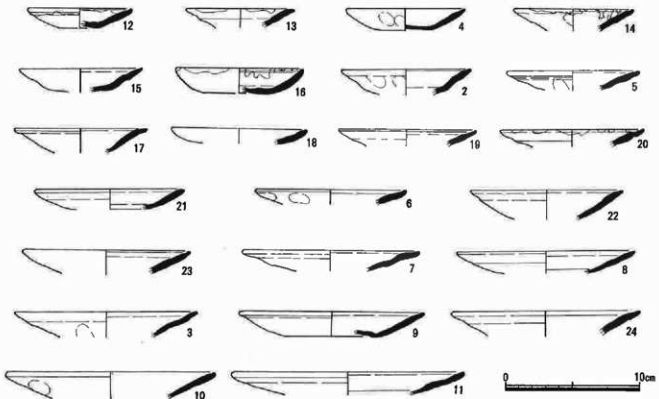
包含層出土品

12～20は小型品の土師皿である。12～14は口径約7.8cm、約8.2cm、約9.0cmで、高さ約1.5cmを測る。比較的焼成の甘い粗雑な仕上がりで、口縁端部の内外面にはタールが付着する。15は口径約9.2cm、高さ約1.7cmで、焼成が甘く内外面とも表面が剥離している。16は口径約9.6cm、高さ約1.8cmで、体部は内湾して立ち上がる。口縁端部にタールが付

着する。18も内湾して立ち上がる浅い皿で、口径約10.2cmを測る。17は口径約10.0cm、口縁端部は横ナデし外反させている。19・20は口径約10.4cm、10.8cmで、20の端部にはタールが付着する。21～24は中型品である。21は口径約11.2cm、高さ約1.5cmでまっすぐに開く体部を持つ。22は、やや内湾ぎみに立ち上がり、端部先端を外につまみだす。23・24は、口径約12.6cm、14.2cmで外に開いて立ち上がり、先端は丁寧な横ナデを施す。色調は浅黄橙色がほとんどを占める。



第11図 T1遺構図



第12図 T1出土遺物実測図

第2節 T2の調査

i) 層 序

T2は、T1の東側に設定した調査区で、東西約19m×南北約8mを測る。両トレンチの高低差は約2.4mで、石垣が組まれている。調査前の地表面は319.87mを測る。20年程前までは民家があったが、調査時は木造の小屋および土蔵が残っていた。今回の工事では、小屋が流路に係るため調査前に取り壊された。

調査では、石垣と多くのピット・土坑を検出した。ピットには、規則的に並ぶものは見られないが、掘立柱建物等の柱穴かと考えられる。

土層の堆積は、約20cmの表土をめくると、茶色砂礫土(約20~30cm)、砂利土、黄茶色土(遺構面)で、地表面から約70cm下で今回の遺構面となる。また、調査区より東側、道までの間についてはかく乱を受けており、全く遺構を検出しなかった。

ii) 遺 構 (第13図)

1. 石垣1 (第14図)

調査区の西側および北側で検出した石垣である。調査区の西側は、T1との境が石垣になっているが、これは新しいもので、今回の調査では、この石垣の約70~130cm手前、現地表面から約60cm下で、2段の石垣を検出した。この石垣は、北端で90°曲がって、調査区の北側を東へ約16.5m延びる。北側の石垣は、杉の巨木が林立する法面を掘削して検出したもので、近年の民家に伴うものではない。しかし、遺構面を形成する黄色土を掘り下げておらず、逆に約5~15cmの黒色土層をかんだ状態にあることから、この遺構面に伴うものではないが、横積みであることから比較的古いタイプのものである。石垣を埋めている埋土中には、レンガ・瓦・薬瓶などの陶器が混在していることから、民家建築の際に整地され埋められたものと思われる。

石垣は天場が揃っておらず、さらに上部があったものと考えられる。

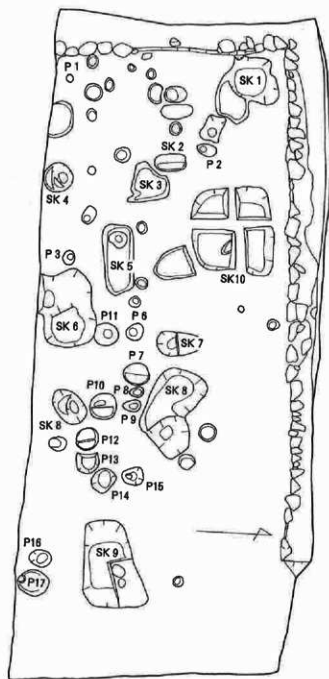
2. 土坑 (第13図)

SK1

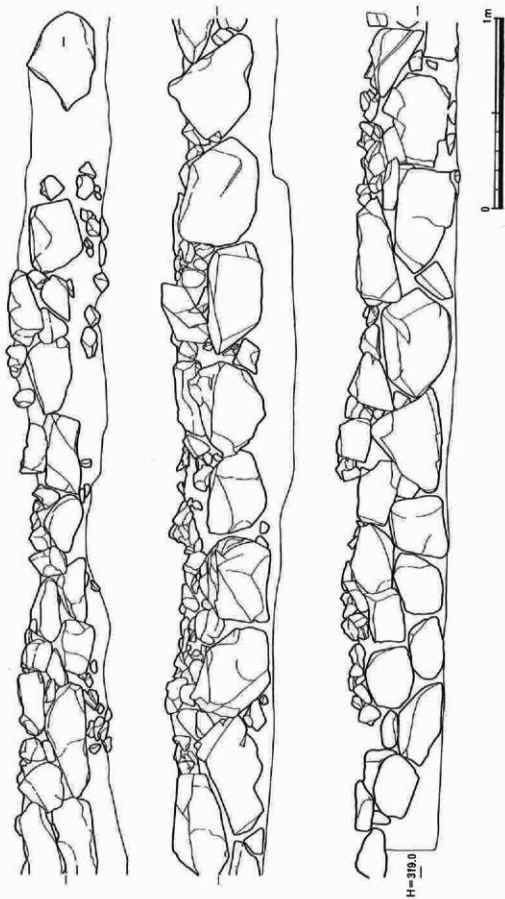
石垣のコーナー部分で検出した楕円形の土坑で、南北約1.5m×東西約1m、遺構検出面からの深さは約30cmをはかる。おろし金410が出土した。このSK1は、西側の直径約1mの土坑を切っており、この土坑からは近世の瓦等が出土していることから、SK1も近世以降の遺構であろう。したがって、410の所属時期も近世以降の可能性が高い。

SK2

西側中央で検出した楕円形の土坑で、長辺80cm幅50cm、深さ約23cmを測る。埋土は黒色土である。遺物は出土していない。



第13図 T2遺構図



第14图 石垣实测图

SK3

SK2の東側にある一辺約1mの方形の土坑で、切り合い関係ではSK2に先行する。埋土は薄茶色土で、深さ約26cmを測る。遺物は出土していない。

SK5

中央付近で検出した長方形の土坑で、東西約1.7m、南北約80cm、深さ約24cmを測る。土坑の西端には、陶製の大甕26の底部が埋置された状態で出土した。T1やT4での同じ大甕の出土状況から、この遺構面に伴うものではない。

SK5からは、他に土師皿25が出土している。

SK6

中央南端で検出した不定形の土坑である。中段の深さ約42cm、一番深いところで約60cmを測る。上層からは近世の瓦等が出土していることから、後世の廃棄土坑と考えられる。近世陶磁器に混じって、土師皿27~37、天目茶碗片、寛永通宝などが出土している。

SK7

南北約1.2m、東西約60cmを測る倒木痕である。土師皿小片と炭が出土した。

SK8

中央東寄りで検出した不定形の土坑で、東西約2.4m、幅約1m、深さは中段で約13cm、東側で深くなっており約35cmを測る。遺物は、土師皿38~53、瀬戸の播鉢が出土した。

SK9

調査区東端の土坑で、東西約2.3m、南北約1.3mの台形状を呈する。埋土中より人頭大の礫や近世の瓦が出土しており、近世の廃棄土坑と考えられる。出土遺物には土師皿54~56がある。

SK10

調査区北側で検出した、約2m四方の隅丸方形の大型土坑で、遺構検出面からの深さは約20cmを測る。埋土の堆積は、茶色粘質土・黄色粘質土・砂質土で、土師皿57が出土している。中央東寄りに直径約30cm、深さ約12cmのピットがあるほか床面はフラットで、遺構の性格は不明である。

3. その他の遺構 (第13図)

ピット

ピット群は北側ではほとんど見られないが、調査区の南半分ではほぼ全面で検出した。ピットの埋土は、黒色土・薄茶色土・茶色土である。多くのピットから土師皿の破片が出土したことから、ほとんどが京極氏段階の遺構と考えられる。

P1は直径20cmの円形のピットで、深さ約36cmを測る。埋土は薄茶色土である。土師皿58~61、木炭が出土した。P2は長径約50cm、幅約30cmの細長いピットで、深さは約22cmである。埋土は薄茶色土で、土師皿62~73、瀬戸播鉢、近世陶器、炭が出土した。P3は長径約35cm、短径約25cmの楕円形のピットで、深さ約34cmを測る。土師皿74~77、

用途不明の鋼製品 411、炭が出土した。P 4 と P 5 は、隣接する直径約 30 cm の円形のピットで、埋土は黒色土である。P 4 ~ 7 はほぼ一列に並ぶピットで、埋土は同じ黒色土である。また、いずれのピットからも、土師皿の小片が多く出土した。P 4 は深さ約 44 cm で、土師皿 78 が出土している。P 5 は約 26 cm で、土師皿小片が出土した。P 6 は直径約 40 cm、深さ約 23 cm を測る。土師皿細片と鉄釘 412 が出土している。P 7 は長径約 55 cm、短径約 45 cm の円形のピットで、深さは約 12 cm である。土師皿 80 ~ 82 が出土した。

P 8 は、P 7 のすぐ東にあるピットで、長径約 45 cm、短径約 30 cm、深さ約 8 cm のほぼ円形のピットで、埋土は薄茶色土である。土師皿細片が出土している。P 9 は P 8 に隣接するピットで、長径約 45 cm、短径約 30 cm の楕円形を呈する。深さは約 16 cm を測る。出土品には土師皿 84・85 がある。P 10 は直径約 70 cm の円形の大型ピットで深さ約 50 cm を測る。埋土は P 9 とともに黒色土で、土師皿 86 ~ 90 が出土した。P 11 は、SK 6 の北に隣接し、この土坑にわずかに切られている。直径 65 cm、深さ約 46 cm の円形のピットで、土師皿 91・92 が出土した。P 12 は直径約 50 cm、深さ約 50 cm の円形のピットで土師皿の小片が出土した。P 13 は直径約 60 cm の円形のピットで、P 12 に切られている。深さは約 30 cm である。土師皿小片が出土した。P 14 は直径約 60 cm の円形のピットで、深さ約 53 cm を測る。完形の小型の土師皿 93・94 が出土した。P 15 は、直径約 50 cm のピットで、深さ約 33 cm を測る。埋土は黒色土で、土師皿 95 が出土した。

P 10・11・14 はほぼ同規模で 2 m の間隔で東西に並ぶ。さらに、それぞれ北側に、約 90 cm 離れて一回り小さな P 6・9・15 がある。何らかの建物遺構の一部の可能性がある。

P 16 は長径 55 cm、短径 45 cm の楕円形のピットで深さは約 41 cm を測る。土師皿小片が出土した。P 17 は調査区が一番東で検出した円形のピットで東西約 80 cm、南北約 70 cm、深さ約 23 cm を測る。ピットの南端で直径約 15 cm の扁平な石を検出した。土師皿の小片が出土している。

ii) 遺物

1. 土器類 (第 15 ~ 17 図)

T 2 からは、中世の遺物として、土師皿、国産陶器のうち瀬戸播鉢・瀬戸美濃天目茶碗が出土した。また、縄文土器のほか、陶製の大甕など近世陶磁が出土している。

SK 5 出土品

25 は土師皿で口径約 14.6 cm を測る。口縁端部は横ナデにより長く外反させている。色調は浅黄橙色である。26 (第 35 図) は近世の大甕の底部で、底径約 21.2 cm を測る。素焼きの大甕である。

SK 6 出土品

出土したのは全て土師皿で、27 ~ 29 は小型の土師皿である。27 は口径約 6.4 cm、まっすぐ開く体部を持つ。28 は完形品である。体部はまっすぐ開く、底部内面と体部の屈曲部に「の」の字のナデ跡とはね上げ痕が明瞭に残る。29 は口縁端部で外反する。口縁部にはタ

ールが付着している。いずれも、体部外面には指押え痕が明瞭に残る。色調は浅黄橙色である。

30・31は口径約12.6cmを測る。31はまっすぐ開く体部から、口縁部をわずかに外反させる。32は口径約13.2cmで、口縁部は横ナデによって屈曲させ外反させる。体部外面屈曲部には横ナデ痕が明瞭に残る。33は口径約14.0cmで、まっすぐ開く体部を持ち、口縁先端を横ナデにより細く納める。34は口径約14.6cm、口縁部を横ナデにより外反させる。35は口径約15.0cmを測る。まっすぐ開く体部から、口縁部を長く外反させている。36は口径約15.2cm、体部でわずかに屈曲して、まっすぐ外に開く、端部は細く納める。37は口径約16.2cmを測る。色調はにぶい黄橙色または浅黄橙色である。

SK8出土品

38～53は土師皿である。38は2分の1が残っており、口径約6.2cmを測る。底部ははげしく凹凸しているが、口縁部は同じタイプで粗雑品が多い中で、比較的丁寧に仕上げられている。39・40は完形品である。口径はともに8.8cmで、高さは約1.9cm、約1.7cmである。まっすぐ開く体部を持ち、内面屈曲部には「の」の字状の横ナデ痕とはね上げが確認でき、体部外面には指押え痕が残る。41は口径約10.4cm、42は口径約10.8cmを測る。口縁部をわずかに外反させたあと、先端をつまみあげる。43は口径約11.0cmを測る。口縁部を横ナデにより屈曲させ、外反させる。44は口径約12.0cmを測る。体部外面にひも状のタール痕が付着している。45は口径約12.4cmを測る。まっすぐ開く体部で口縁部先端をわずかに上につまみあげる。46は口径約12.6cm、47は口径約14.6cmを測る。口縁部をわずかに外反させる。48は口径約14.6cmを測る。まっすぐ開く体部を持つ。49は口径約14.6cm、高さ約2.2cm以上の深めの皿で、やや内湾した体部から口縁部を外反させる。50も同様の器形で口径約15.0cmを測る。51は口径約16.0cmで、口縁部を横ナデにより外反させる。外面には明瞭な段が残る。52は口径約16.0cmを測る。53は口径約17.0cmで、体部でわずかに屈曲して立ち上がったあと、口縁部を外反させる。色調はほとんどが浅黄橙色を呈す。

SK9出土品

54は口径約6.8cmの小型の土師皿で、凹凸のある粗雑な作りをしている。体部内面にはなで上げ痕が残る。55・56は、口径約15.2cm・16.8cmで体部がまっすぐ開き、55は口縁端部を外反させる。色調は浅黄橙色である。

SK10出土品

57は土師皿で、口径約13.8cmを測り、口縁部は横ナデにより外反させ、端部をつまみあげる。

P1出土品

58～61は土師皿で、58は口径約10.6cmで、まっすぐ立ち上がる体部を持ち、口縁端部は横ナデによりつまみあげる。59～61は、大きく外に開く浅めの皿で、口径はそれぞれ約11.6cm、14.4cm、18.6cmであるが、いずれも小片で同一固体の可能性はある。

P2出土品

62～65は小型の土師皿である。62は口径約6.4cm、器高1.5cmを測る。指ナデ痕による凹凸が残る粗雑品であるが、器壁は薄く、口縁部を外反させる。63は口径約8.8cmで器高が高い。64は口径約9.0cmを測る。体部は内湾しながら立ち上がる。65は口径約9.2cm、器高約1.6cmで、まっすぐ開く体部を持つ。いずれも色調は浅黄橙色で、器壁に指痕が明瞭に残る。

66は口径約11.2cm、口縁部は3回の横ナデにより複雑に屈曲している。端部内面に沈線が巡る。67は口径約11.6cmを測り、口縁部外面にはヘラ状工具によると思われる段があり、指押え痕が明瞭に残る。同型品と比べ、成形が粗雑である。68・69は、口径約12.0cm、12.2cmで、口縁端部にタールが付着する。70～73はまっすぐ開く体部を持ち、口縁部をわずかに外反させるもので、口径約14.4cm、16.6cm、17.6cm、19.0cmを測るいずれも小片である。焼成は堅く、色調は浅黄橙色を呈す。

P3出土品

74～77は土師皿である。74・75は、口縁部でわずかに外反するもので、いずれも口縁端部にタールが付着する。口径約8.4cm、8.6cmを測る。76は口径約13.6cmを測る。77は口径約14.6cm、器高約2.3cmを測る。薄く丁寧な成形で、平らな底部から明瞭な屈曲を持って体部がまっすぐ立ち上がる。口縁部はやや外反する。屈曲部には明瞭な指ナデ痕が見られる。

P4出土品

78は3分の1程度残存しており、口径約5.8cmと小型の土師皿である。ただし、類例からみるとびつな形で、もう少し口径が大きい可能性がある。79は口径約16.4cmを測る。

P7出土品

80～82は土師皿である。80・81は、平らな底部から体部がまっすぐ立ち上がり、口縁部でわずかに外反する。口径約8.9cm、10.6cmを測る。体部外面に指押え痕が残る。82は口径約10.8cmを測る。82は口径約11.8cmを測り、まっすぐ立ち上がる体部を持つ。

P9出土品

土師皿が出土している。84は口径約10.2cm、器高約1.1cmの浅い皿で、まっすぐ外に開いた体部で、口縁端部先端を上につまみだす。85は口径約12.6cm、器高約2.5cmの深めの皿で、体部は外反しながら立ち上がる。

P10出土品

86～90は土師皿で、86・87は内湾ぎみに立ち上がる体部から、口縁部が横ナデによって大きく外反する。口径約11.2cm、12.4cmを測る。同一個体の可能性がある。88～90は、体部が外に開き、口縁部を外反させる。口径は約13.2cm、90は約14.2cmを測る。

P11出土品

91は口径約6.8cmの小型の土師皿で3分の2が残存する。体部には指押え痕が残る粗雑な成形である。92は口径約16.2cmを測る。

P14出土品

93・94は完形で出土した小型の土師皿で、口径約6.4cm、6.8cmを測る。内面に「の」の字の指ナデとはね上げの痕跡が残る、

P15出土品

95は土師皿で、口径約14.4cmを測る。まっすぐ外に開いて立ちあがる。

包含層出土品

96～108は、遺構面直上で一括して出土した遺物である。このうち96～107は土師皿で、ほとんど、体部が外に開き口縁端部を外反させる器形を持つ。97・98はやや内湾ぎみに体部が立ち上がる。

108は土師質土器の鍋である。半球形の体部を持つ煮沸容器である。口径約37.4cmで、体部は約10.5cmまでが残存している。斜めに立ち上がる体部から、外反した口縁部がまっすぐ延びる。煤が付着して確認しにくい、が、体部内面には横方向の刷毛目がほどこされ平滑に仕上げられている。外面は煤および剝離により明瞭でないが、縦方向の刷毛目がわずかに確認できる。口縁部外面には成形の際の指頭痕がわずかに残る。137とともに、土師質土器の鍋は上平寺地区では初めての出土である。

109～133は、包含層出土の土師皿である。109は薄い器壁を持つ小型品で、底部内面と体部の屈曲部に「の」の字のナデ跡とはね上げ痕が残る。134は、花瓶の口縁部で、口径約15.4cmを測る。色調は灰黄褐色を呈す。135は口径約21.0cmを測る壺の口縁部で、鉄釉が施されている。136は、口径約22.8cmは土師質土器の鍋である。斜めに立ち上がる体部から外反する口縁部が内湾して立ち上がる。137は陶器の壺底部である。暗赤褐色の釉が施されている。

2. 金属製品 (第36図)

T2からは、用途不明の銅製品2点と寛永通宝が出土している。

SK1出土品

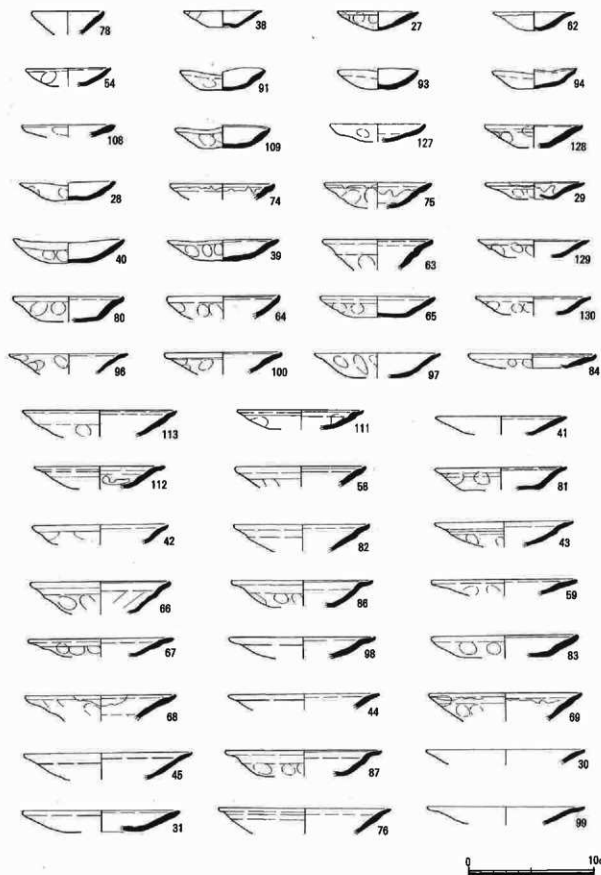
410は板状の銅製品で、上下面と片側の側面は完結しており、側面約7mmほどが90°折られている。将棋の駒のような平面形をしており、上部の中央は凹む。上部に直径約4mmの穴があり、下部には半円形の切り込みが両端にある。高さ約14.5cm、上幅約7.8cm、下幅約8.3cmが残存しており、復元すると、上幅約8.7cm、下幅約11.2cmである。厚さは約1mmである。用途についてはわからない。

P3出土品

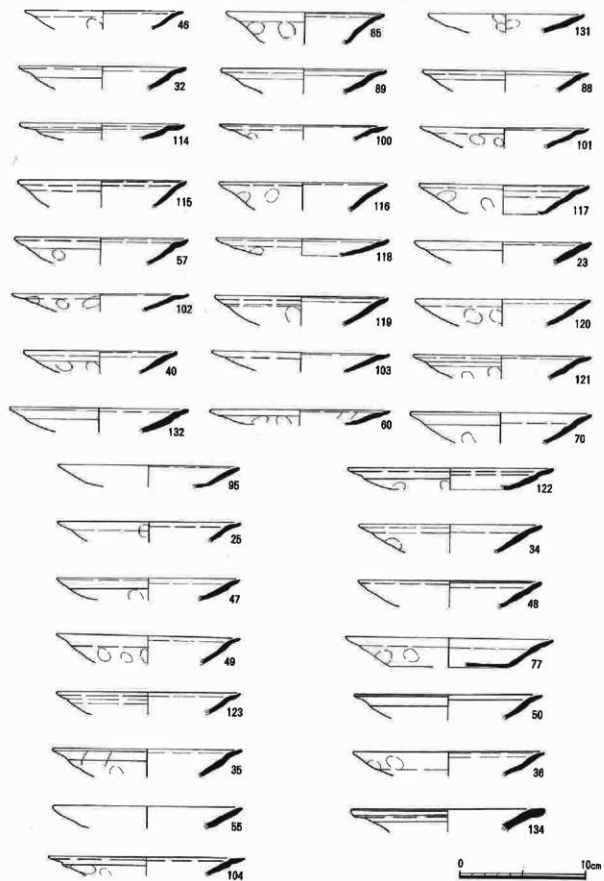
411も板状の銅製品で、長方形の二辺は完結している。中央やや上より直径約4mmの穴が開いている。厚さは約1mmである。用途はわからない。

P6出土品

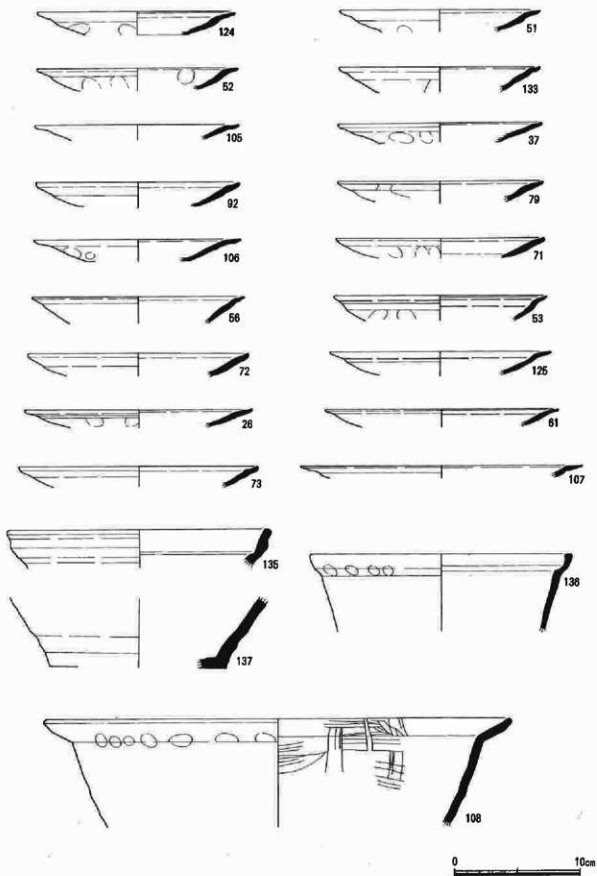
412は鉄釘である。残存長約2.9cm、幅約0.9cmで、断面は方形である。



第15图 T2出土遺物実測図(1)



第 16 图 T2 出土遺物実測図 (2)



第 17 图 T2 出土遺物実測図 (3)

第3節 T3の調査

i) 層 序

T3は、T2と道・防火水槽をはさんで東側に位置する調査区で、東西約20m×南北約9mを測る。道との高低差は約2.4mで、垂直のコンクリート法面である。調査前の地表面は316.44mを測る。

調査地の南側には上平寺の集会所がある。この施設は、現在でも杉本坊と呼ばれており、内部の一角に室町末から江戸期の仏像が祀られている。杉本坊は、寺院上平寺の法灯を伝える唯一の寺坊で、昭和31年頃までは寺院として存続し、その後、集会所として活用されている。現在の建物は昭和54年に新築されたものである。

調査区の現状は、集会所の敷地よりも約1.5m高いが、もとは、北側の「内堀」と呼ばれる溝川から自然に傾斜して、集会所と同じレベルになっていたという。しかし、昭和54年の杉本坊新築工事に際して、西側の道から調査区を通して工事車両が入っており、このときに現況が大きく改変されている可能性が考えられた。さらに、調査区西側の防火水槽工事による改変も考えられる。現在は山林である。

調査は、排上を反転して行なった。調査では、石列と石垣、被熱した石囲い遺構、散乱した状態の瓦のほか、土坑とピットを検出した。

調査区西半分では、遺構検出面は三段になっており、石列や瓦を検出した北端の遺構面は、約2m幅しかなく南側は削られていた。土坑SK1～3を検出した二段目の遺構面は、南へ傾斜しており、北端と南端の比高差は約45cmある。さらに約40cm落ち込んで、南端の遺構面に続く。

東半分では、その様相を異にし、土坑、ピット、石組み遺構が散在する。西側北端で検出した石列や石垣は、東側には続いていない。遺構面は、西側の二段目及び三段目が続いており、南に大きく傾斜している。南北の比高差は最大85cmある。南側では、遺構面直上の黒色土中に土師皿・山茶碗などが包含され、黄色土中からは縄文土器片が出土している。

ii) 遺 構 (第18図)

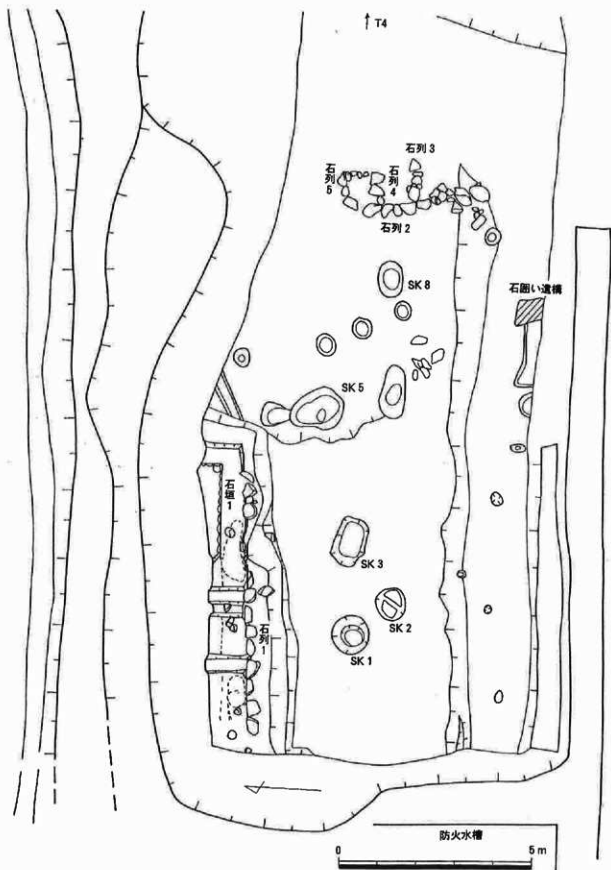
1. 石列

石列1 (第19図)

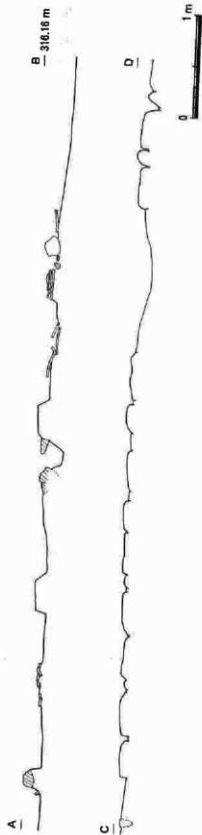
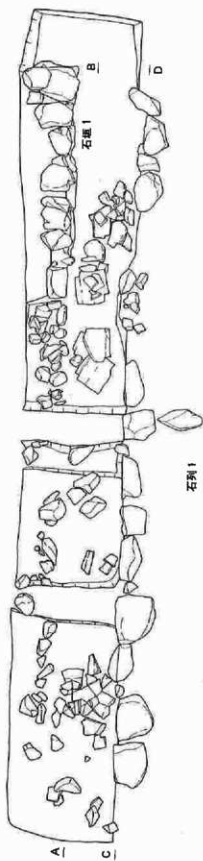
調査区北側で検出した石列1は、30～50cmの平らな石約15点が東西に約7m並んだ状態で出土した。石の面は北に揃えられている。また、方形あるいは円形の石と細長い石が交互に配置されており、前者は礎石と考えられる。その間隔は約90cmである。この石列は、屋敷の一番奥を区画する塀に伴うものと考えられる。

この石列の北側で検出した石垣1との間には、近世の瓦が落下した状態で出土している。枚数は10枚以上を数え、出土状況から石列に伴う塀のものと考えられる。

このことから、石列1および石垣1は、近世以降の建物に伴う遺構である。



第18図 T3 遺構図



第19圖 石列1・石垣1実測圖

石列2～5（写真2）

調査区東側中央付近で検出した石列で、北側では黄色土層の遺構面に乗るが、南側ではこの遺構面より約45cm高く、黒色土層に乗るかたちで、ほぼ水平に南北方向へ約1.9m並ぶ。おそらく、石列2に伴う遺構面があったと思われるが、調査では検出できなかった。

20～50cmの石を、東側に面を揃えた状態で一列に並べている。天場は揃っていない。さらに、東側へ約40～50cm延びる石列3～5があり、その間隔は約20～30cmである。石列3と4は、東端を比較的小さな石を並べた石列で閉じられ、正方形の枡形状をなす。

これらの石列の性格は不明である。



写真1 石列2～5

2. 石垣

石垣1（第19図）

石列1に伴うもので両者の間隔は約60～70cmを測る。石垣の東端は、コーナーになっており北側に折れることから、石垣はここまでだったと思われる。また、北側へ折れた先については、調査区外のため確認できなかった。

石垣の延長は約2.3mしか残っていなかったが、西側には石垣の延長線上に大小の石が一直線に並んでいた。これらは、元の石垣の根石部分の石列と考えられることから、元の石垣は7m以上となる。

石垣の高さについては、最高で三段しか残っておらず、その形状から、これ以上あったことは間違いない。おそらく、背後の山（京極氏館跡）からの土留めの役割を果たすための石垣だったと考えられる。

3. 土坑（第18図）

SK1

西側中央で検出した円形の土坑で、直径約1m、深さ約65cmを測る。中でいったんくびれて落ち込んでいる。埋土は黒色土である。土師皿138～140が出土した。

SK2

SK1の南東で検出した円形の土坑で、直径約80cm、深さ約45cmを測る。二段に落ち込み、埋土は黒色土である。遺物は出土していない。

SK3

SK1の東側で検出した隅丸長方形の土坑で、直辺約1.3m、短辺約80cmを測る。深さ約58cmで、埋土は黒色土である。土師皿141が出土した。

SK5

調査区の中央付近で検出した楕円形の土坑で、直辺約1.4m、短辺約1m、深さ約15cmを測る。この土坑から東側では、ビットや石積み遺構など検出された。

SK8

石列2の西側で検出した楕円形の土坑で、長辺約1m、短辺約60cm、深さ約20cmを測る。土師皿142～145、瀬戸の播鉢が出土した。

4. その他の遺構 (第18図)

ビット

ビットは主に調査区東側で検出した。また、西側の南端でも、浅い落ち込み状のビットを5ヵ所検出している。ほとんどが直径50cm前後のもので、深さは15～25cmである。

遺物は出土していない。

石囲い遺構 (写真3)

調査区中央南端で検出した遺構で、15～40cmの石7点で約60cm四方の正方形の区画を作っている。内部には炭や焼土が入っており、石囲いの内面は焼けていた。かまどなどの用途が考えられるが、出土遺物がなく、所属時期等は不明である。



写真2 石囲い遺構

iii) 遺物 (第20・21図)

1. 土器類 (第20・21図)

T3からは、中世の遺物として、土師皿、内耳皿、国産陶器のうち瀬戸播鉢・瀬戸美濃天目茶碗が出土した。これらは、京極氏段階の遺物である。また、中世の別時期の遺物として、灰釉碗、古瀬戸の壺が出土している。その他、縄文土器 (第6節)・近世陶磁などが出土している。

SK1出土品

138～140は土師皿である。口径約11.4cm、12.4cm、17.4cmで、まっすぐ開く体部から、口縁部がやや外反する。

SK3出土品

141は口径約11.0cmの薄手の土師皿で、体部はやや内湾して立ち上がり、口縁端部を横ナデにより大きく外反させる。

SK8出土品

142～145は土師皿で、口径約12.0 cm、13.4 cm、14.8 cm、15.8 cmを測る。143がまっすぐ立ち上がる体部を持つほかは、口縁部が外反する。

包含層出土品

146～148は土師皿で、調査区東側中央付近で検出した石列2～5の埋土中で検出した。146はまっすぐに開く体部を持つ。口径は約6.6 cmである。147は口径約11.4 cmで、口縁部をやや外反させる。148は口縁部を横ナデにより外反させ、先端をつまみあげる。149は瀬戸の播鉢底部である。底径約8.1 cmを測る播り目原体は9本以上である。内外面とも暗青灰色の釉薬が施されている。胎土は密で浅黄色を呈する。

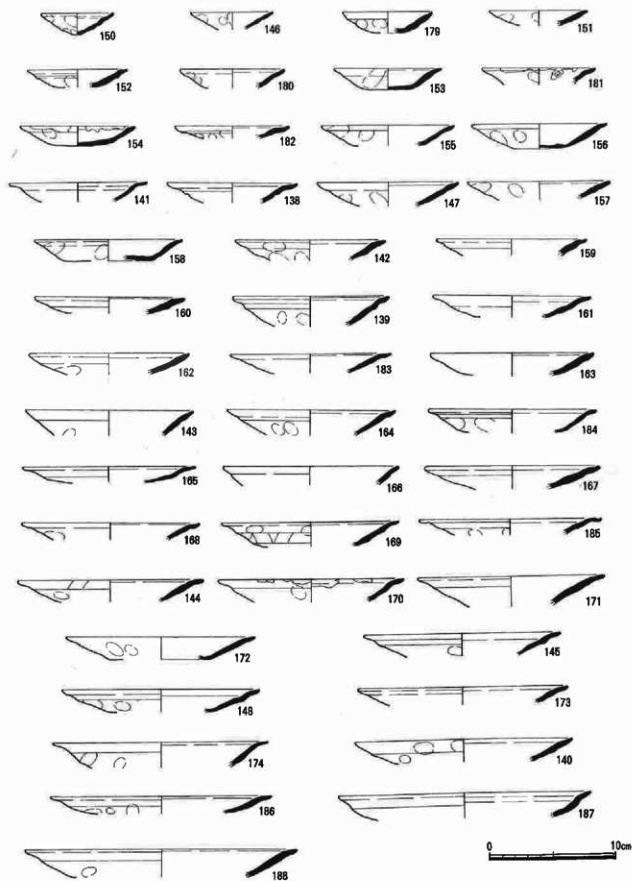
150～178は、調査区南東端の遺構面直上で検出した黒色土層からの出土である。150～174は土師皿である。

174は素焼きの壺の口縁部で、口径約15.0 cmを測る。古墳時代の遺物である。176は灰釉陶器の碗で、口径約15.4 cmを測る。ゆるやかに内湾しながら立ち上がり、口縁端部でわずかに外反する。10～11世紀頃に属すものと考えられる。177は瀬戸の播鉢口縁部で、口径約30 cmを測る。胎土は密で暗青灰色を呈す。刷毛目は見られない。178は唐津焼の壺の底部で、底径約9.4 cmを測る。体部外面は明緑灰色、内面には黒褐色の釉薬がかかる。胎土は密で、褐色を呈す。内面に当て具による同心円紋が残る。16世紀末～17世紀初頭に属すと考えられる。

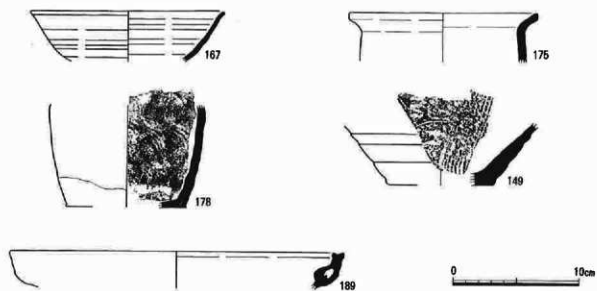
その他、179～189は包含層出土の遺物で、179～188は土師皿である。188は口径約21.8 cmの大型品である。189は土製の内耳鍋で、口径約26.6 cm、粗雑な作りの取っ手を持つ。口縁端部上面に幅約5 mmの沈線を巡らせている。取っ手の部分だけの小片であるが、口縁部からすぐ内湾していることから、浅い器形で焙烙鍋のような用途が考えられる。関東地方に多く、上平寺地区でははじめての出土である。時期は京極氏段階と考えられる。

2. 金属製品 (第36区)

T3からは、包含層から鉄釘が2点出土している。413は、長さ約3.7 cm、幅約0.6 cmで先端は欠損している。414は長さ約2.5 cm、幅約0.7 cmで断面は方形である。



第20圖 T3出土遺物実測圖(1)



第 21 圖 T3 出土遺物実測図 (2)

第4節 T4の調査

i) 層 序

T4は、T3に続く調査区で、東西約30m×南北約7mを測る。調査前の地表面は314mである。

調査地の北側には、京極氏館との間に内堀がある。西側では、単なる溝であった「内堀」が、ここでは幅約2m、深さ約3mの堀状をなしている。堀と調査区の間は、土塁状の土盛りで、調査区との比高差は約2.3mを測る。

調査区の現状は、山林および竹林である。調査では、溝、土坑、ピットを検出した。また、調査区東端で、近世の大甕を検出した。

土層の堆積は、南側壁面中央付近では、約20cmの表土をめくると、茶色砂礫土、砂利土、黄茶色土、明茶色土（遺構面）で、地表面から約80cm下で今回の遺構面となる。

また、土塁部分に2ヵ所断割りST1・ST2をいれて、内堀の確認を行なった。

ii) 遺 構 (第22図)

1. 溝

SD1

調査区北西端で検出した東西にはる溝で、幅約80cm、深さ約20cmを測る。土塁状遺構の下にもぐりこんでいることから、今回検出した遺構面は土塁状遺構に先行するものと考えられる。遺物は出土していない。

SD2

SD1に並行して南側に位置する溝で、幅約1m、深さ約20cmを測る。SD1と規模や埋土が類似する。東へ約6.5mいったところで丸く収まる。遺物は出土していない。

2. 土坑

SK1

調査区中央東寄りで検出した約90cm×70cmの柱穴で、深さ約60cmを測る。南西隅で柱痕416を確認した。遺物は出土していない。

SK2

SK1の西側で検出したほぼ同規模の土坑で、深さ約34cmを測る。遺物は出土していない。

SK9

SK2を切る形で検出した土坑で、直径約110cmの円形を呈する。深さは約12cmである。遺物は出土していない。

3. その他の遺構 (第 22 図)

埋め甕 (図版 7)

調査区東端で検出した陶製の大甕 197 を埋設した遺構で、他の遺構よりも新しく、近世以降のものである。地表下約 50 cm で口の部分を検出した。大甕は口径約 83 cm、高さ約 75 cm で、低部は直径約 21 cm で、穿孔などはみられない。内部の埋土は暗茶褐色砂質土で、口縁内部に 60 cm × 40 cm の石が落ち込んだ状態で出土している。また、小型の一石五輪塔の宝珠部分 417 が甕内部から出土した。甕の内面が滑らかなことから、水甕などの機能を考えたが、五輪塔残欠や口縁付近の柱状の石材の存在から埋葬に伴う可能性もある。

ビット

ビットは、調査区中央南側で検出した。

P 3 は、SK 3 に切られた円形のビットで、土師皿小片が出土した。P 10 は直径約 40 cm のビットで、土師皿 190・191 が出土している。他のビットもほぼ直径約 40 cm ~ 50 cm の円形である。P 11 は壁面で検出したビットで、土師皿 192 ~ 196 のほか、土師皿に付着した状態の鉄釘 415 が出土した。

iii) 遺物 (第 24 図)

1. 土器類 (第 24 図)

T 4 から出土した土器はわずかで、ほとんどが土師皿である。

P10 出土品

190・191 は土師皿である。190 は口径約 14.2 cm でまっすぐ外に開く体部を持つ。191 は口径約 17.0 cm、口縁部外面に明瞭な段が残る。

P11 出土品

192 ~ 196 は土師皿である。192 は小型の土師皿で、口径約 6.6 cm を測る。193・195・196 は、口縁部を外反させるもので、口径約 11.2 cm、17.4 cm、19.2 cm を測る。194 は深めの皿で、体部がまっすぐ立ち上がり、口縁部を外反させる。口径は約 12.8 cm である。

埋め甕 (第 35 図)

197 は、埋設して使用されていた近世の大甕である。ほぼ完形で出土した。

包含層出土品

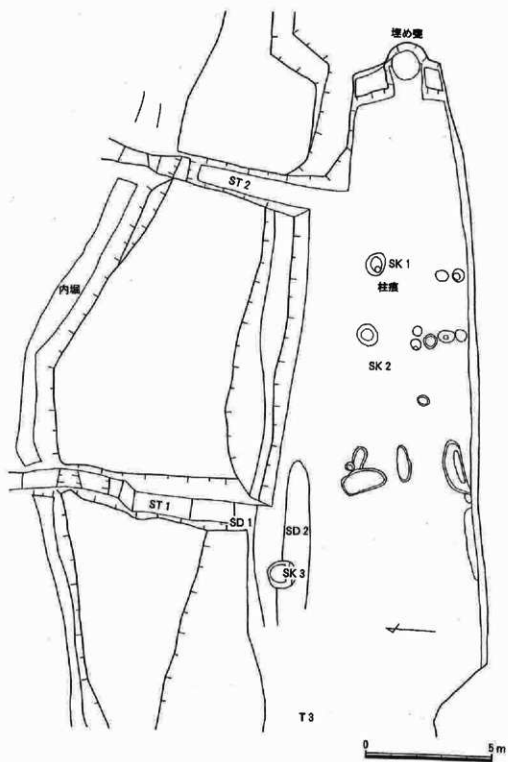
198 は土師皿で、口径約 9.8 cm を測る。

2. 金属製品 (第 36 図)

T 4 からは、鉄釘 415 が土師皿に付着した状態で出土している。長さ約 2.3 cm、幅約 0.9 cm を測る。断面方形である。

3. 木製品 (第 36 図)

416 は、SK 1 から出土した柱痕である。



第 22 図 T4 遺構図

4. 石製品 (第 35 図)

417 は、埋め甕 197 内から出土した一石五輪塔の残欠で、宝珠と請花の部分である。高さ約 13 cm、幅約 8.4 cm を測る。石材は灰オリーブ色の安山岩で、県内では産出しない。

iv) サブトレンチ (第 23 図)

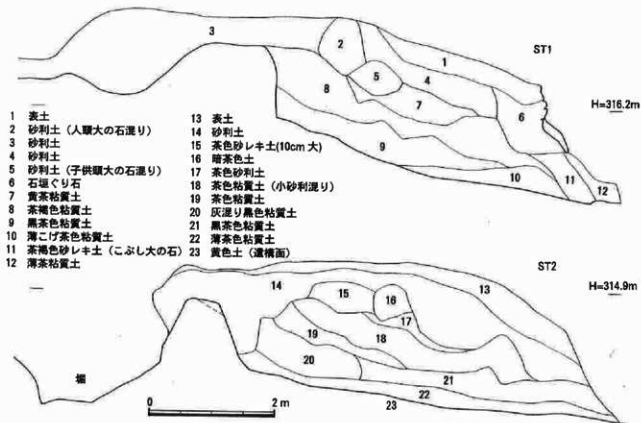
ST1

調査区北側の土塁状の盛り土を確認するために、バックホーで断割りを入れた。ST1 は西側に設定したトレンチで、堀の部分は調査区外のために掘削していない。土層の堆積は、表土の下に砂利土が約 40~50 cm 堆積している。その下は、黄茶色・茶褐色・黒茶色・淡いこげ茶色の粘質土になっている。上層の砂利土には人頭大の石を含む層があり、覚所谷川の流出土の堆積であり、下層の粘質土が本来の土塁をなしている。南側の石組みは砂利土の崩壊を留めるために築かれたものである。

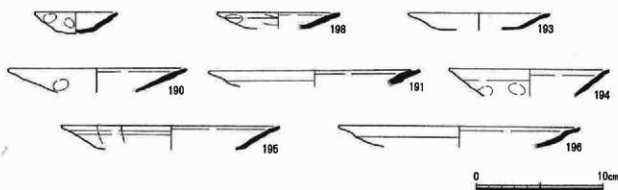
ST2

東側に設定したトレンチで、土塁部分は、ST1 同様、上層は砂利土層、下層は粘質土層になっている。堀部分は現状で、深さ約 2.2m、幅約 3m を測る。表土を除去すると黄色粘質土が現れ、これが堀底だと思われる。堀の南側は、雑混じりの砂利土で谷の流出土か。

ST1・2ともに遺物は出土していない。



第 23 図 ST1・ST2 断面図



第 24 図 T4 出土遺物実測図

第 5 節 T5 の調査

i) 層 序

T5 は、仮設道予定地に設定した調査区で、T1 の南西山側に位置する。東西約 7 m × 南北 22 m を測る。調査前の地表面は 322.20 m である。

調査地は、西側の尾根が張り出した先端にあり、尾根側には小区画の削平地が数段ある。また、調査区南側にも、削平地が並び、現状は植林地であるが、かつては水田として利用されていたようで、今回の調査区の一部下には用水池があり、地下には導水施設の「マンボ」が埋設されている。「マンボ」は、鈴鹿山地の東麓の岐阜・三重県の農村で発達した導水施設で、人力により地下に直径 1 m のトンネルを掘ったものである。町内では、上平寺地区に特有の施設である。試掘の結果、仮設道の中央付近では遺構を検出しなかったことから、近世になって、山を切り開き水田化したものであろう。

調査区の現状は、山林である。調査区の東側は一段低い屋敷地で、比高差は約 1.6 m である。

調査では、竪穴状遺構、溝、土坑、落ち込み、ピットなどを検出した。また、特殊な遺構として、土師皿の一括投棄遺構がある。

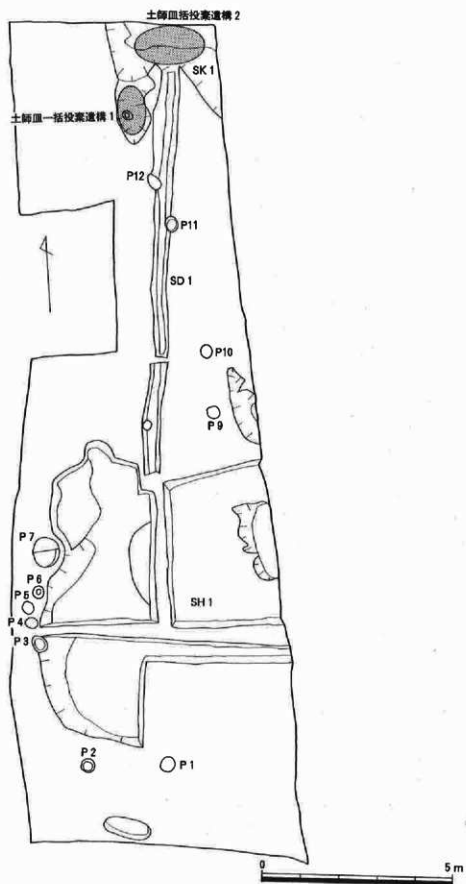
土層の堆積は、北側壁面では、約 25 cm の表土をめくると、暗茶色砂質土、淡茶色砂質土、茶色粘質土（遺構面）で、地表面から約 90 cm 下で遺構面となる。南東端では、約 40 cm の表土をめくると、淡茶色砂質土が堆積し遺構面となる。地表面からの深さは約 70 cm である。

ii) 遺 構 (第 25 図)

1. 溝

SD1

調査区中央付近から北端の落ち込みまで南北にはしる溝で、幅約 40～60 cm、深さ約 15 cm を測る。埋土は暗茶色粘質土である。土師皿 199～216、耳皿 217、陶器の皿 218、播鉢 219～224 が出土した。



第 25 図 T5 遺構図

2. 竪穴状遺構 (第 25 図)

SH1

調査区の南側で検出した竪穴状の遺構である。東西約 6 m 以上×南北約 7.5 m を測る。南東側 1/4 は後世にかく乱されており掘削しなかったが、もとは隅丸方形を呈していたと思われる。遺構検出面よりの深さは西側で約 32 cm、東端で約 70 cm で、東へ深くなっている。埋土は、西側で茶色砂質土・小石混じりの黄茶色粘質土・茶色砂質土で、東側では黄色粘質土・うす茶色砂質土・黄茶色粘質土である。床面では 2 ヲ所で落ち込み状遺構を検出した。

SH1 の外縁には、取り囲むように柱穴 P1～P9 を検出した。直径 70 cm を測る P7 以外は、直径 40 cm 前後の円形の小穴で、P2 のように SH1 に向って斜めに掘れているものがある。完形品を含む多量の土師皿 225～257 が出土し、ほかに火鉢 258 がある。これらの出土遺物から、SH1 は中世の遺構と考えられ、P1～P9 はこれに伴う柱穴で、地下式倉庫のような機能を考えたい。

3. 土師皿一括投棄遺構

土師皿一括投棄遺構 1 (第 26 図)

調査区北端で検出した落ち込み SX1 に投棄されたような状態で出土した。この落ち込みは、東西約 3 m × 南北最大幅約 25 m の不定形をしており、深さ約 36 cm を測る。

この中央付近から土師皿の一括投棄遺構を検出した。土師皿は東西約 1.2 m、南北約 1.8 m の範囲に散在しており、長さ約 40～50 cm の細長い石 2 点があった。土師皿は、法量が直径 20 cm 近くの大型品から 6.5 cm 前後の小型品まで含まれており、バラエティーに富んでいる。口縁部に煤やタールが付着したものが 1 点ある。集積状況は、上層・下層の 2 面に分かれるようで、複数回の投棄が考えられる。出土した土師皿は、小片を含むと 100 点 (259～359) を数える。その他の遺物には、柱状の鉄製品 418 や木炭がある。

土師皿一括投棄遺構 2 (第 27 図)

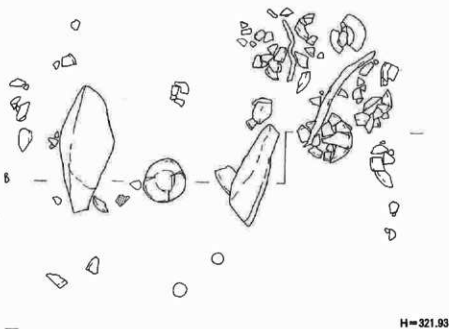
一括投棄遺構 1 の南側で検出した土師皿の集積遺構で、東西約 50 cm × 南北約 80 cm の楕円形の範囲内とその北側に約 27 点の土師皿がまとまって投棄されていた。土師皿は、中型品が中心で、一部大型品が混じるが、口径 7 cm 前後の小型品は見られない。この点が、遺構 1 と若干様相が異なる。また、煤やタールが付着するものは 1 点ある。土師皿に混じって砥石 419 点と木炭が出土している。遺構 2 については、層としての重なりはなく、1 回の投棄によるものと考えられる。

その他、調査区中央付近で、土師皿が集中している個所を検出したが、遺構 1・2 と比べると散在してまとまりがなく、投棄遺構としては取り扱わなかった。

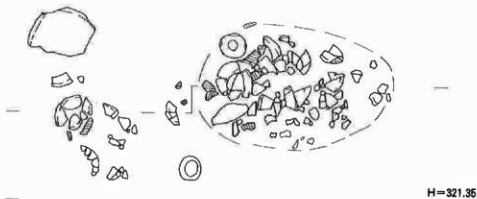
4. その他の遺構 (第25図)

ピット

ピットは、SH1の周辺で検出したP1~9と、やや離れてP10、SD1を切る形で隣り合うP11・12がある。P7以外は、直径40~50cmのもので、深さは10~30cmのものが多い。P7のみ直径約70cmを測り、埋土は暗茶褐色粘質土で、他のものと様相を異にする。いずれも、遺物は出土していない。



第26図 土師皿一括投棄遺構1実測図



第27図 土師皿一括投棄遺構2実測図

0 50m

iii) 遺物 (第29~34図)

1. 土器類 (第29~35図)

T5からは、2カ所の一括投棄遺構から土師皿が多量に出土している。また、SD1・SH1から、耳皿・播り鉢・火鉢が出土した。

SD1出土品 (第29・30図)

199~216は土師皿で、このうち204までは口径10cm以下の小型品である。199はまっすぐ開く体部を持つ。201・204は、口縁部でわずかに外反させるもので、同一個体の可能性がある。口縁部内外全面にタールが付着する。202は、小型の粗雑品で、体部が内湾する浅い皿である。203・205もタールが付着している。206・210は共に火に係ったようで、器壁の剥離が激しい。同一個体か。207・208・209・211・212は、口径10.4~12.2cmで、外反する口縁を持ち、端部にタールが付着する。209は体部に帯状の煤が付着する。207・208は同一個体の可能性が高い。214は口径約13.0cm、口縁部屈曲部外面を強く横ナデし、外反させる。色調は浅黄橙色がほとんどを占める。

217は耳皿である。ほぼ二分の一の残欠で、短径約5cmを測る。口縁をやや内湾させて立ち上げている。低部はわずかにくぼませる。

218は陶器の皿で、口縁部に鉄釉が施されている。

219~222は播鉢の口縁部で、瀬戸の製品と考えられる。いずれも小片で口径約27~38cmを測る。播り目は確認できない。胎土は密で、色調は219が青灰色の他は赤茶褐色を呈す。223・224は播鉢の底部で、223は221と同一個体で、底径約8cmを測る。播り目が6カ所確認でき、播り目原体は13本である。224は219と同一の可能性が高い。底径約10cm。播り目は2カ所確認でき、原体は13本である。

SH1出土品 (第29・30図)

225~257は土師皿である。色調は浅黄橙色で、中型品の底部は、暗灰色を呈す。225~228は体部に凹凸があり、口縁端部が波打つ粗雑な作りで、口径約6.5cm~7.2cmを測る。230・231・233は口径が8cm前後で、口縁部にタールが付着する。いずれも口縁部でわずかに外反する。236は口径約10.6cm、口縁端部は内湾する。239は口径約11.2cmで、口縁端部に強い横ナデを施し外反させる。240も口縁を外反させ、端部にタールが付着する。248は口径約12.8cmで、まっすぐ外に開く体部を持ち、端部にタールが付着する。252は受け口状の口縁部を持つ薄手の土師皿で、口径約14.4cmを測る。

258は奈良火鉢は、口縁端部に凸帯が巡り、体部との間に菱形の文様のスタンプを押している。体部内面には、口縁部貼り付け時の指オサエとナデの痕跡が明瞭に残る。内外面ともに暗灰色で、内面屈曲部は灰白色である。

土師皿一括投棄遺構1出土品 (第29・30図)

259~282は土師皿で、投棄遺構1の上層からまとまって出土した。このうち259~269までは口径約5.7cm~7.6cmの小型品で、全体の約半数を占める。

270~274は口径約8.4cm~10.6cmで、口縁端部を横ナデして外反させる。273には唯一、

口縁部にタールが付着している。

275～282 は口径が 13 cm 以上の大型品で、胎土が密で、丁寧な成形がなされている。282 は口径約 18.2 cm を測る。いずれも色調は浅黄橙色で、大型品の底部は暗灰色のものがある。

投棄遺構 1 上層の出土遺物は、口縁の法量および成形などから、259～274 の小中型品と、口径約 13 cm 以上の 275～282 の 2 グループに分けることが可能である。法量の違いによる用途を考えるうえで貴重な資料である。

283～335 は土師皿で、投棄遺構 1 の下層部から出土した。比較的小片が多く同一個体を含む可能性もある。上層の半分を占めた小型の手づくね品は、283・284 の 2 点のみで、口径約 6.5 cm・6.8 cm である。

285～303 は口径約 8.4 cm～12.9 cm で、口縁部をナデてわずかに外反させるものが多い。285 は口縁部を外反させるもので、体部に指押え痕が残る。287 はまっすぐ立ち上がる体部を持つ。292 は完形の土器で、内外全面に煤が、口縁端部にはタールが付着している。口径約 11.2 cm を測る。296 は小片であるが同様の状況を呈す。口径約 12.2 cm を測る。300 は底部内面屈曲部に強いナデ痕が残る。

304～335 は、口径 13 cm 以上のもので、口縁部を強く横ナデして外反させ、屈曲部外面に明瞭な段を有するものがほとんどである。この口縁部の丁寧な成形が前者とは異なり、胎土も緻密である。307 は口径約 13.6 cm で、煤が付着している。317 は口縁端部を大きく長く外反させている。

336～359 は土師皿で、比較的まとまっていた投棄遺構上下層の周辺から出土した。口径 10 cm 以上のものが多く、特に 13 cm 以上の大型品が大半を占める。いずれも、浅黄橙色を呈し、暗灰色の黒斑を持つものが多い。

土師皿一括投棄遺構 2 出土品 (第 33・34 図)

360～387 は土師皿である。360 は口径約 9.4 cm、まっすぐ外に開く体部を持つ。361～364 は口径 10 cm 前後で、361 は口径約 9.8 cm、口縁部をわずかに外反させたあと、先端をつまみあげている。口縁部に煤が付着しており、灯明皿として利用されたものか。365 はほぼ完形で出土した。口径は約 11.5 cm である。366～377 は口径約 12.6 cm～15.9 cm で、口縁端部を強くナデて外反させる器形が多い。374～381 は口径 17 cm 以上の大型品である。381 は約 19.2 cm を測る。

その他の出土品 (第 34 図)

382～409 は、調査区中央付近の西側で、遺構面直上から比較的集中して出土した土師皿である。382～390 は口径が 8.2 cm～11.8 cm のもので、384・385・387 は、ほぼ完形で出土している。385 は口径約 9.8 cm、口縁部をわずかに外反させたあと、先端をつまみあげている。口縁部にタールが付着する。389 は口径約 11.0 cm で、全体に煤が、口縁端部にはタールが付着する。391～409 は口径約 12.9 cm～18.2 cm を測り、口縁部を強く横ナデする。

いずれも色調は浅黄橙色で、大型品の底部には暗灰色の黒斑がある。

2. 金属製品 (第 36 図)

418 は、一括投棄遺構 1 から出土した鉄製品で、現存の長さは約 7.2 cm、厚さは約 1.2 cm を測る。元は、厚さ約 2 mm の板状をなす。用途についてはわからない。

2. 石製品 (第 36 図)

419 は砥石である。泥岩製できめが細かく、仕上げに用いられたものであろう。長さ約 14.2 cm、幅約 6.6 mm、厚さ約 3.9 cm を測る。表面全面および両側面の一部に研磨された跡があり、表面は緩やかに湾曲している。表面に約 23 条の線が残り、3 方向の磨りが確認できる。底部も研磨して安定させている。

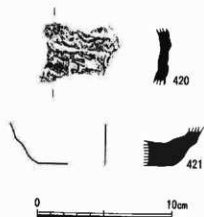
第 6 節 縄文時代の遺物 (第 28 図)

今回の調査では、T2・T3 からわずかであるが縄文土器片が出土している。図化できたのは右の 2 点のみである。

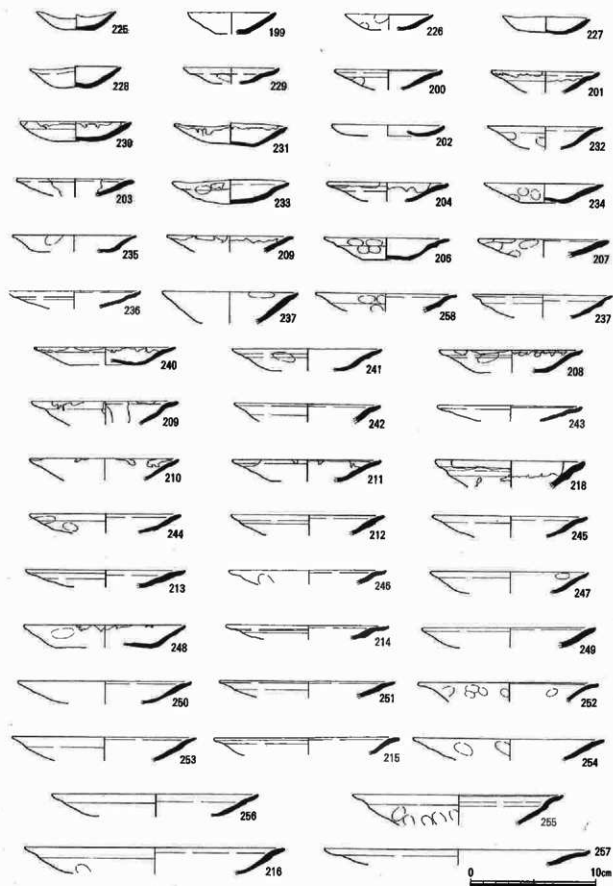
420 は、T2 の遺物包含層から出土した土器で、早期末頃に属す押型文系の土器と考えられる。胴部の破片で、幅約 1.4 cm の突起を巡らせ、突帯上の施文は条痕によるものである。町内では、起し又遺跡(曲谷)で、当該期に比較的近い押型文系の穂谷式(曲谷)の工器が 1 点出土している。また、平成 15 年度に県教育委員会が行なった十連寺遺跡(大清水)の調査でも、早期中葉の縄文土器の小片が出土した。

421 は、底部で後期に属する可能性がある。

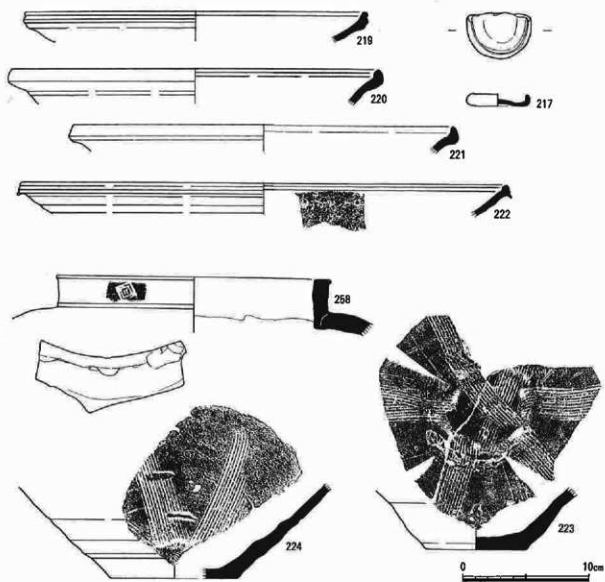
上平寺遺跡では、平成 12 年度に滋賀県教育委員会が行った調査で、中期末を主体とする遺物が出土しており、この時期の遺跡の存在が予想された。中期から後期の遺物は、山籠では大清水を中心に出土しているが、今回わずか 1 点とはいえ、早期末の土器が出土したことは、十連寺遺跡の土器片とともに、伊吹山麓における縄文人の営みの始まりを示すものとして注目される。



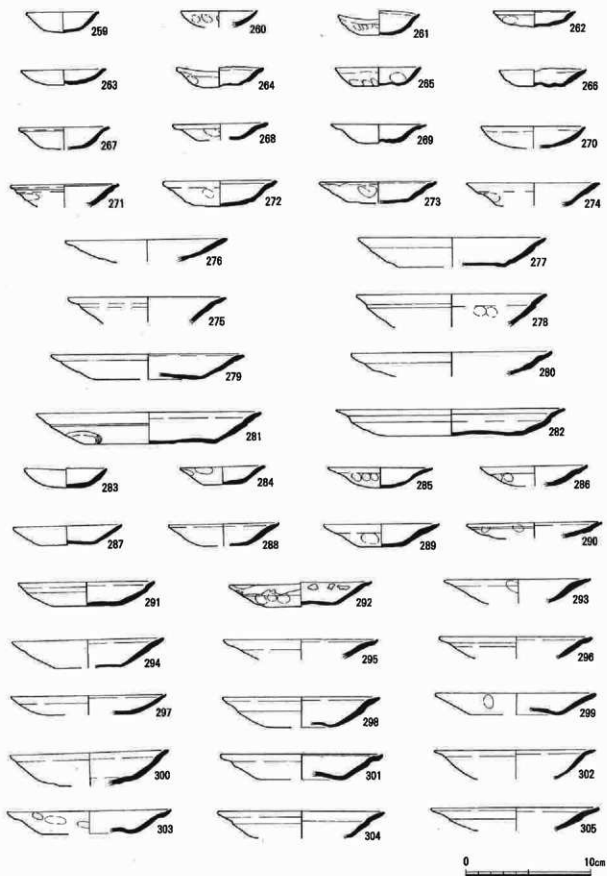
第 28 図 縄文土器



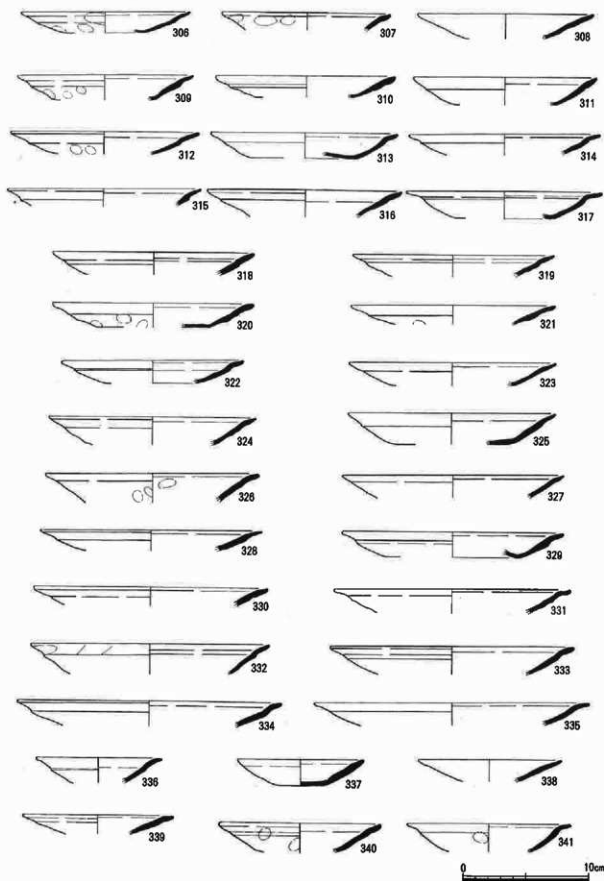
第 29 图 T5 出土遺物実測図 (1)



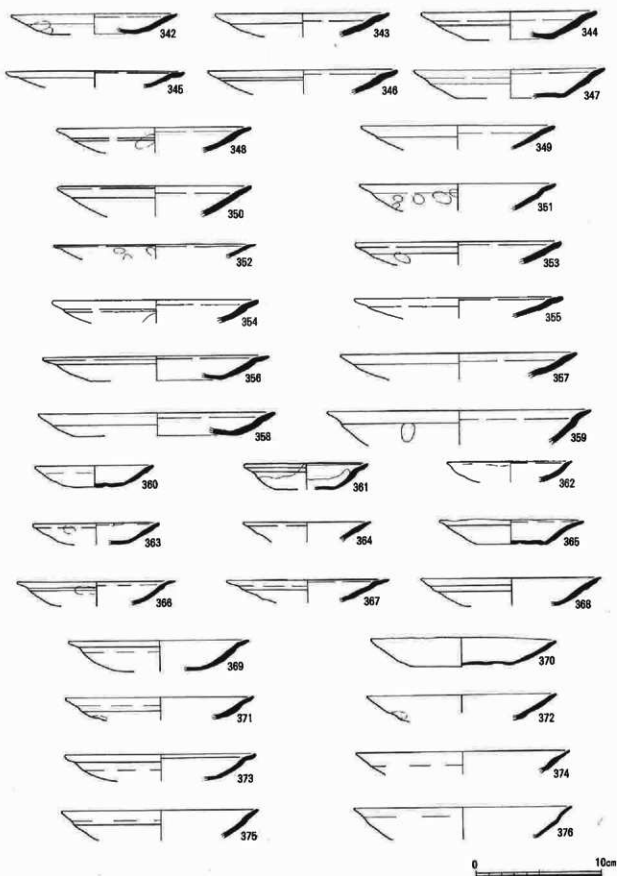
第 30 图 T5 出土遺物実測図 (2)



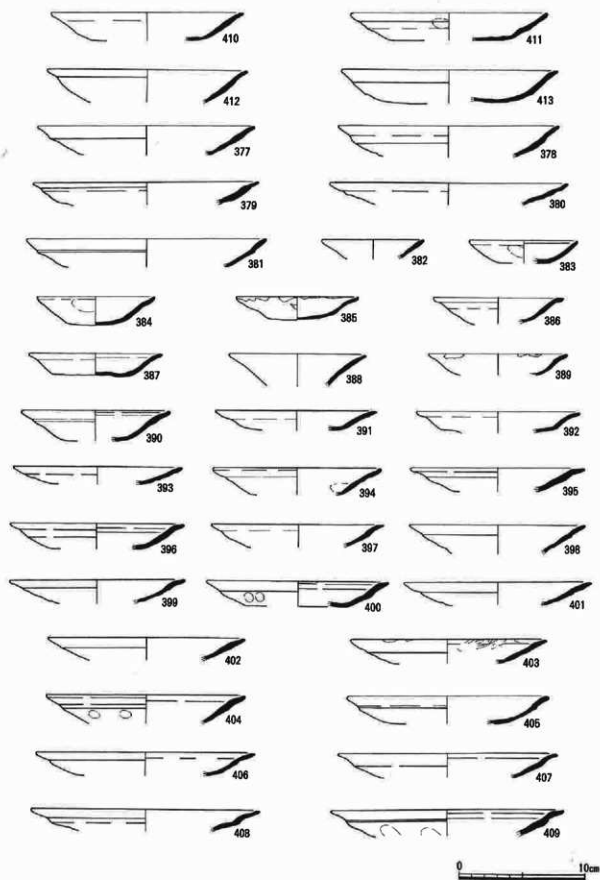
第 31 图 T5 出土遺物実測図 (3)



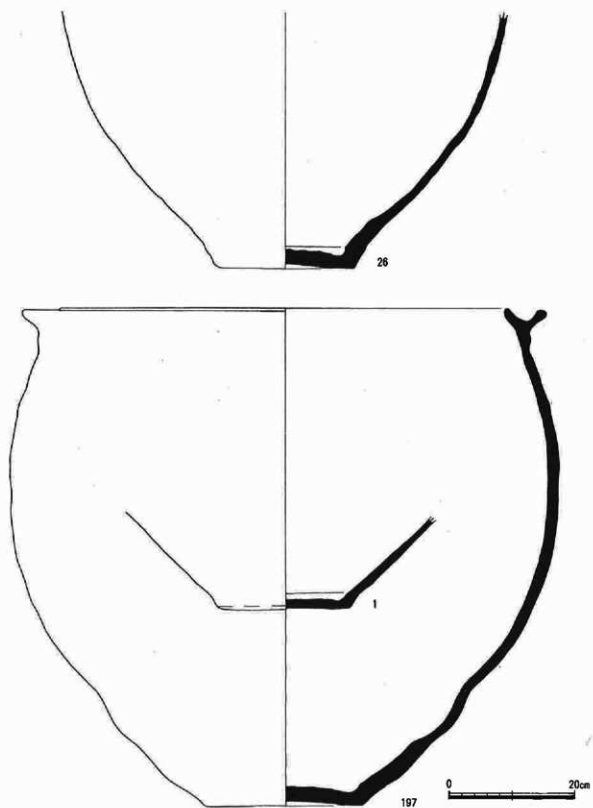
第32图 T5出土遺物実測図(4)



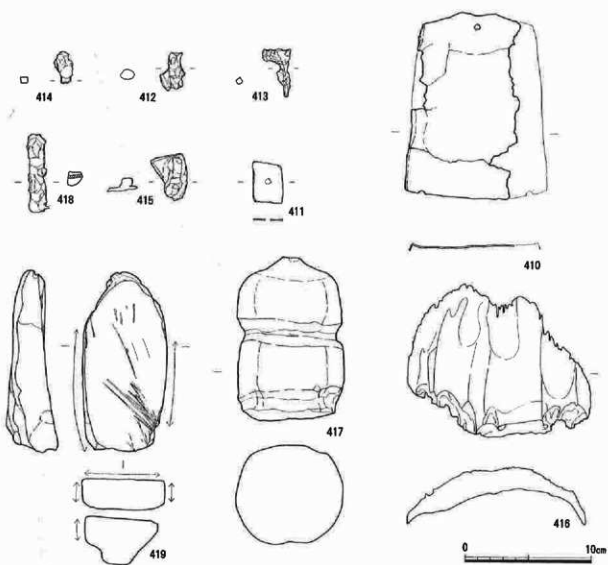
第 33 图 T5 出土遗物实测图 (5)



第34图 T5出土遺物実測図(6)



第 35 图 近世陶器实测图



第36図 金属製品・石製品・木製品実測図

第5章 まとめ

今回は、『上平寺城絵図』に描かれた「内堀」の南に接する地域での発掘調査であった。いままで、いわゆる上平寺城下町を指す上平寺遺跡での発掘調査は、外堀より南の「市店民屋」地区での調査が中心で、外堀内の「町屋敷」や「諸土屋敷」では、全く面的な発掘調査が行われていなかった。

それだけに、今回の調査は、京極氏館の前面に展開する武家屋敷地区の遺構の検出が期待され、さらに、京極氏の城館に先行する寺院「上平寺」の解明を目的に行なった。

結果は、いずれのトレンチからも京極氏の城下町に伴う明瞭な遺構は検出されなかった。それは、T1やT3のように、今回の調査原因となった覚所谷川の流土による遺構面の掘削や、近年の工事による破壊に原因があり、覚所谷川の流路に沿う今回の調査区は、度重なる土砂災害によって、現状がたびたび改変されているものと考えられた。すなわち、T2やT3で検出した石垣の基底部は、災害復旧後の土留めの石垣であり、住人の苦勞がしのばれる。また、T4で内堀に沿う土塁状の盛り土を掘削（ST2）したが、やはり、人頭大の石を含む砂利土で大きく侵食されていた。

遺物については、一括した土師皿の良好な資料を得ることができた。

本章では、遺物・遺構について若干触れ、調査成果から考えられることを述べてまとめにかえたい。

遺物

出土した土器・陶磁器のうち図化できたものは約413点を数える。産地別にみると、土師皿・耳皿といった土師質土器、瀬戸美濃焼・瓦質土器といった国産陶磁がほとんどを占め、輸入陶磁器はほとんど見られない。時代を異にするものが数点あるほかは、京極氏時代に一致する15世紀末から16世紀初頭の遺物である（表1）。

最も多いのが土師皿で、すべて手づくりの京都系土師皿で、器形によって分けると、おおよそ下記のようなになる。

皿A：小型、薄手で、底部や口縁部に凹凸がみられる（4など）

皿B-1：体部が内湾して立ち上がる浅めの皿（202など）

皿B-2：体部がまっすぐ外に開く浅めの皿（58など）

皿C-1：体部が内湾ぎみに立ち上がり、口縁部を横ナデにより外反させる。

皿C-2：体部がまっすぐ外に開き、口縁部を横ナデにより外反させる。

口径7.5cm未満の土師皿はほとんど皿Aであり、中大型品の多くは、口縁部を外反させる皿Cが主流である。

表1は、図化した資料を口径を基準に集計したものである。5mmごとの集計で、もっとも多いのが①14cm以上～14.5cm未満で、次に②13cm以上～13.5cm未満、③15cm以上～15.5cm未満、さらに④16cm以上～16.5cm未満となる。本文中でも述べたが、口径13cm以

上の大型の土師皿は、口縁部を強く横ナデして外反させ、この屈曲部外面に明瞭な段を有するものが多い。このような口縁部の成形が13cm以下のもの比べて丁寧で、胎土も緻密である。ただし、この数量のなかには、T5で検出した土師皿一括投棄遺構1のような特殊な出土品が含まれており、この遺構は表2のように13cm以上のものが多く、仮に土師皿投棄遺構1の数値を表2から抜くと表3になる。この表では、先の③・④のような大型品ではなく、11cm以上～11.5cm未満、9cm以上～10.5cm未満が続く。

今回の調査区全体を概観すると、①13cm以上～14.5cm未満、②9cm以上～11.5cm未満を中心に、③15cm以上～16.5cm未満の大型品と④6.5cm以上～7cm未満にもピークが見られる。

これを、平成12年度に県教育委員会が調査した、上平寺南館遺跡の上師皿の集計表(表4)と比べてみたい。ほとんどが家臣団屋敷に付属する土塁の盛土中から出土したものである。ここでは①9cm以上～9.5cm未満、②6.5cm以上～7cm未満、③13cm以上～13.5cm未満に明瞭なピークがあった。さらに、平成10～12年度の城下町部分の調査(表5)では、①7cm以上～7.5cm未満、②9cm以上～9.5cm未満、③11cm以上～11.5cm未満ということになる。

城下町部分の調査では、土師皿の法量を、小型品を6.5cm以上～7.5cm未満、中型品を8.5cm以上～9.5cm未満、大型品を13.0cm以上～15cm未満が中心としたが、今回の調査でも、ほぼこの法量で分けることが可能である。ただし、城下町の最上部に位置する今回の調査区では、13cm以上の大型品が多いことが、過去の2回の調査とは明らかに様相が異なっている。京極氏館跡の前面であることに関係があると考えられる。いずれにしても、上平寺の発掘調査や表面採集では、京極氏館跡・家臣屋敷跡・城下町跡のいずれからも京都系土師皿が、他の土器陶磁器を卓越して出土している点が注目される。貿易陶磁もわずかである。

さて、土師皿の用途は、灯明皿、酒杯、盛り皿などが考えられる。今回の出土品で、煤やタールの付着により明らかに灯明皿として利用されたものの法量別個体数は表6のとおりである。7.5cm以上～13cm未満に集中し、9cm前後と11.5cm前後がもっとも多い。この2法量では、全体の約半数が灯明皿である。この結果は、先の城下町部分の調査と同じである。灯明皿に使用される土師皿は、いずれも口縁端部を外反させている。先端をわずかに上につまみあげるものもある。

T5で検出した2カ所の一括投棄遺構の土師皿は、口径が約5.5cm以上～22cm未満で、法量がバラエティに富んでいること、京極氏遺跡で普通に見られる口縁部に煤やタールが付着した灯明皿がほとんどないこと、砥石と一緒に出土していることなど、このような遺構の性格を考える上で貴重な資料である。また、一括資料として、城館出土の土師皿の好例となり、今後他の城館遺跡との比較検討をおこないたい。

その他、中世の遺物では、奈良火鉢など中世人の生活をうかがわせるものがあり、東日本に多い内耳鍋などの遺物もはじめて出土しているが、全体的には極わずかである。

さて、遺物の中に、10・11世紀に属す灰釉の碗があるが、これらは、京極氏の城館以前にこの地にあったという寺院「上平寺」に伴う遺物である可能性も考えられ、上平寺の調査では初めての出土例となった。また、中世以外の遺物では、縄文土器片が数点出土している。

近世以降の遺物は、近年まで家屋があった関係で多量に出土している。なかでも、T1・T2・T4で検出した大甕埋設遺構は、同じタイプのものが屋敷ごとに1基ずつ出土している。その機能は、近世家屋に伴う便槽や水甕などが考えられるが、内面にカルシウム分の付着がないことや、埋土にあまり粘性がないことなど、便槽の可能性は低いと考えている。T4では、五輪塔の残欠とともに、落ち込んだ形で、口をふさぐように柱状の大石が出土していることから、埋葬施設とも考えられる。いずれも底部に穿孔などは見られないが、寺院「上平寺」の坊跡であったとすれば、可能性は残る。

遺構

今回の発掘調査で確認した遺構は下記のとおりである。

- T1 礎石（近代）、大甕埋設遺構（近世以降）、焼土層（中世）
- T2 土坑・ピット群（中近世）、石垣（中世以降）
- T3 礎石列・石垣（近世以降）、石組遺構
- T4 溝・土坑・ピット（中世）、大甕埋設遺構（近世以降）
- T5 竪穴状遺構・溝・土坑・落ち込み・ピット群・土師皿一括投棄遺構（中世）

T1で検出した焼土層には、土師皿や天目茶碗などの小片が混在しており、中世の遺構の可能性はあるが、この面の多くは覚所川の流土と考えられる砂利土が削っていた。

T3で検出した礎石列および石垣は、現在集会所になっている「杉本坊」の前身寺院の北端を区切るものと考えられる。明治6年の『坂田郡上平寺村地引図』には、杉本坊の区画が、T3を含めて1筆で描かれていることから、もともとの寺地がT3の北端まであり、礎石建ち・瓦葺きの塀がこれを区切っていたものと考えられる。検出した石垣は、背後の法面の崩壊を防ぐためのものであろう。

このような寺地のあり方は、江戸期以降、『絵図』にある京極氏段階の内堀を、掘削あるいは埋めて開発したものと考えられる。さらに近代になって、杉本坊の規模が現状のように縮小し、昭和に至って、集会所（杉本坊）の建設工事および隣接する防火水槽の工事により、遺構面が掘削されたものであろう。

今回の調査では、内堀の存在を明らかにすることができなかった。T2では内堀の痕跡がなく、既に掘削されているか、さらに北にあるのかもしれない。T3では上記のような状況が想定できる。T4のST1と2の調査では、内堀らしいものの断面を検出した。

T5で検出した竪穴状遺構は、直径7m前後の隅丸方形を呈し、遺構検出面からの深さは約40～70cmである。外周に直径約40cm程度のピットを巡らしていることから、地下式倉庫のような機能が考えられる。出土遺物は、京極氏段階のものである。

表 1

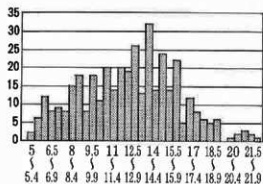


表 2

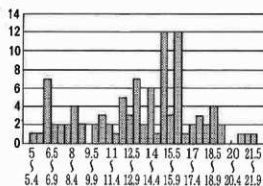


表 3

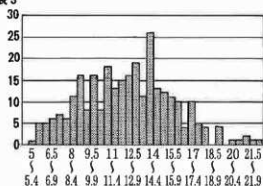


表 4

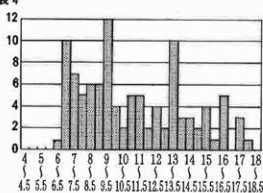


表 5

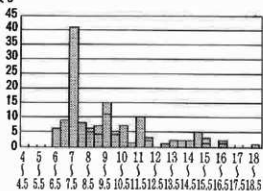
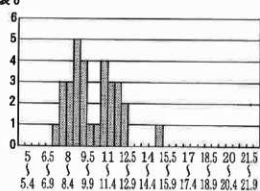


表 6



出土土師口径個体数表



T1 調査前



T1 全景



作業風景



T2 調査前



T2 全景



遺物出土状況



T2SK10



石垣(西側)



石垣(北側1)



石垣(北側2)



石垣(北側3)



T3・4 調査前



作業風景



T3全景



T3石垣



石列(東から) 1



石列(西から) 2



T3(東半分)



T4全景



埋め廻



T4ST1



T4ST2



ST1 堀



ST2 堀



T5全景(北から)



T5全景(南から)



T5SH1



T5土師皿投棄遺構 1



土師皿投棄遺構 1



土師皿投棄遺構 2



内堀（西から東へ）



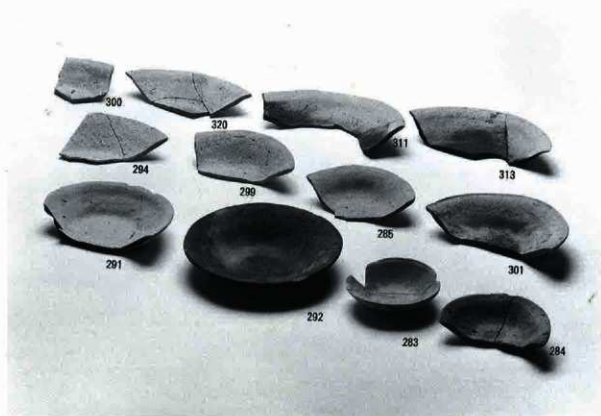
T2・T3出土遺物



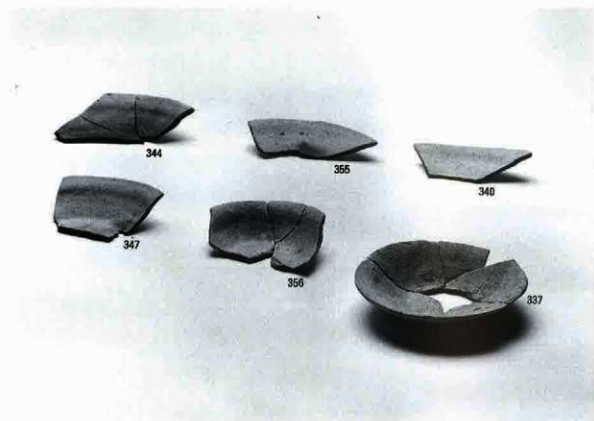
T5出土遺物(1)



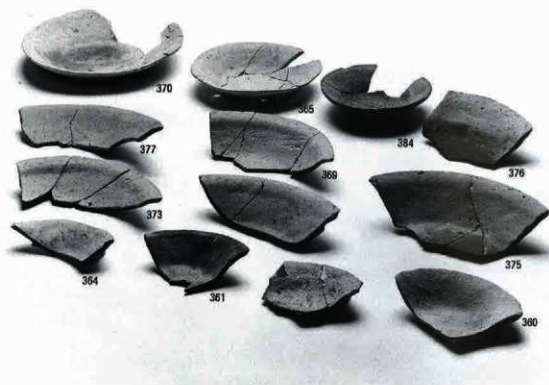
T5 出土遺物(2)



T5 出土遺物(3)



T5 出土遺物(4)



T5 出土遺物(5)



T5 出土遺物(6)



縄文土器



金屬製品
石製品



報 告 書 抄 録

ふりがな	じょうへいじいせき							
書名	上平寺遺跡Ⅱ							
シリーズ名	伊吹町文化財調査報告書							
シリーズ番号	第18集							
編著者名	高橋 順之							
編集機関	伊吹町教育委員会							
所在地	滋賀県坂田郡伊吹町春照37番地							
発行年月日	平成16年3月							
所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査 面積	調査機関	調査原因
		市町村	遺跡番号					
上平寺遺跡	坂田郡伊吹町 大字上平寺 字大門西他	25469	462-045	35°22'55"	136°25'10"	240	020422 ? 030325	砂防 工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物			特記事項	
上平寺遺跡	城下町	戦国時代	土坑、溝 ビット、堀	土師皿・瓦質土器・瀬戸美濃焼 釘・山茶碗・磁石				

伊吹町文化財調査報告書第18集

上平寺遺跡Ⅱ

2004年3月

編集・発行 伊吹町教育委員会
滋賀県坂田郡伊吹町春照37番地
TEL 0749-58-1121

印刷 立本印刷